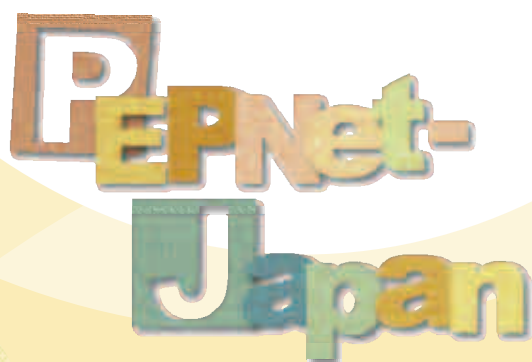
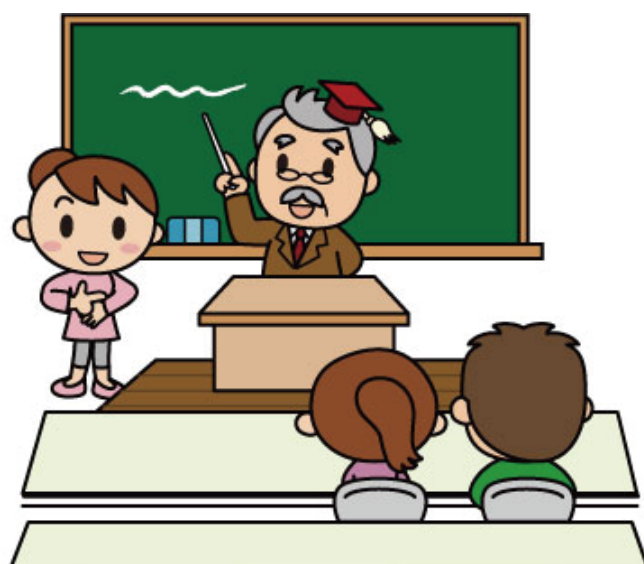


大学での手話通訳ガイドブック

— 聴覚障害学生のニーズに応えよう！ —



はじめに

近年、さまざまな専門分野で学ぶ聴覚障害学生、高度専門領域で仕事をする聴覚障害者が増えてきました。これまで聴覚障害学生に対する情報保障は、文字通訳を中心に対応せざるを得ない状況が長く続いていましたが、ろう学校卒業生の入学増加や手話を用いる聴覚障害学生の大学院進学の新増にともない、手話通訳による高等教育機関での通訳＝「アカデミック通訳」のニーズが高まりを見せています。

しかしながら、聴覚障害学生のみなさん、講義やゼミで手話通訳を使っている、こんな風を感じたことはありませんか？

「一生懸命読み取ろうとするけど、先生の言いたいことがつかめない・・・私が求めている手話通訳と何かが違うけど、何が違うんだろう？」

一方手話通訳者のみなさんは、こんな思いを抱いたことがあるのではないのでしょうか。

「先生の難しい話、一生懸命“そのまま”伝えているけれど、ろう学生の反応がいまいち・・・。なんでだろう？」

このように日本では、高等教育における手話通訳のあり方に関する取組や研究は皆無に近く、聴覚障害学生や手話通訳者の個々の判断や技術で進めざるを得ないという、いわば閉塞的な状況が続いていたのです。このような状況を解決するために、PEPNet-Japan 情報保障評価事業（手話通訳）ワーキンググループは、2007 年度から5年にわたって手話通訳のあり方に関する研究や研修を進めてきました。これらの成果物として、本冊子「大学での手話通訳ガイドブック—聴覚障害学生のニーズに応えよう！—」を作成しました。

本冊子は、手話通訳による情報保障を希望する学生に対して、どのような考え方で、どのような技術を用いて通訳を行えば、より聴覚障害学生の教育的ニーズに応じた通訳が実現できるかを解説しています。手話通訳者にとっては、大学での通訳実践や研鑽を重ねていくにあたって、自らの課題や具体的な目標を探るヒントになることでしょう。聴覚障害学生にとっては、自分のニーズを再確認し手話通訳者に伝える手がかりとしたり、今後目指すべき自分の姿を発見したりするきっかけとなるでしょう。また、大学教員・職員の方にとっては、手話を使う聴覚障害学生のニーズを知る機会となり、日々の教育や支援、それにもなうコーディネートに生かすことができるでしょう。

聴覚障害学生が心から「手話通訳で授業がよくわかった！」と思える環境になり、そして彼らが学問的に思考する力を身につけて社会で活躍する日が来るために、本冊子は高等教育における手話通訳の質的向上を促すものとして大いに役に立つと考えています。

2012 年 3 月吉日
日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク
(PEPNet-Japan) 事務局

もくじ

はじめに

第 1 章	座談会：大学で求められる手話通訳とは？・・・・・・・・・・	3
	高等教育場面における手話通訳像とは？・・・・・・・・・・	4
	使用手話に対する好み・・・・・・・・・・	7
	専門知識と論理伝達・・・・・・・・・・	10
	論理を伝達すること・・・・・・・・・・	11
	今後の展望—さらなる飛躍に向けて・・・・・・・・・・	15
第 2 章	聴覚障害学生のニーズとは？・・・・・・・・・・	18
	意見交換会 概要・・・・・・・・・・	18
	モデル手話通訳 概要・・・・・・・・・・	19
	手話通訳 A・・・・・・・・・・	22
	手話通訳 B・・・・・・・・・・	24
	手話通訳 C・・・・・・・・・・	26
	全体を通して・・・・・・・・・・	30
	まとめ・・・・・・・・・・	31
第 3 章	高等教育に対応するための手話通訳技術とは？・・・・・・・・	34
	論理や態度を伝達するための技術とは・・・・・・・・	34
	モデル手話通訳 概要・・・・・・・・・・	35
	論理や態度の伝達・・・・・・・・・・	37
	語彙選択・・・・・・・・・・	54
	ろう者から見たモデル通訳・・・・・・・・・・	60
第 4 章	高度専門領域の通訳事例・・・・・・・・・・	62
	田門浩氏（弁護士）・・・・・・・・・・	62
	土橋照美氏（手話通訳者）・・・・・・・・・・	65
謝 辞	・・・・・・・・・・	70
付 録	大学における手話通訳チェック表（ミシン目入り）	

第1章

座談会：

大学で求められる手話通訳とは？

本冊子では、大学のような高度専門領域においてどのような手話通訳が求められているのかを学んでいきます。この冊子の刊行にあたり、大学あるいは大学院のような専門領域で手話通訳を利用してきた聴覚障害者や聴者が、手話通訳の技術についてどのように考えているのかを座談会形式で伺いました。ここではこの座談会の様子を紹介し、大学現場で求められる手話通訳技術について考えていきたいと思います。

【司会】吉川あゆみ氏（情報保障評価事業 代表）

1歳10ヶ月のときに失聴。ろう学校幼稚部、小学部を経て、小学2年から一般校にインテグレーションする。大学在学時より関東聴覚障害学生懇談会の活動に携わり、関東聴覚障害学生サポートセンターでは長年にわたって代表を務めた。学部・大学院を通して手話通訳を利用し、高等教育場面の手話通訳のあり方について問題意識を持ってきた。PEPNet-Japan では情報保障評価事業の代表を務め、情報保障の質的向上に従事している。



【ゲスト】



松崎丈氏（宮城教育大学 特別支援教育講座 准教授）

ろう者。高校まで聴覚口話法で育ち、大学ではじめて手話と出会う。学部と大学院修士課程では、文字を中心とした支援を利用してきたが、大学院博士課程に入った頃から手話通訳も利用。学会や研究発表の場で手話通訳の活用方法を模索する中で、大学や研究における手話通訳者の語彙選択や論理展開上の伝達の難しさ等と向き合ってきた。現在は、聴覚障害児・者との係わり合いについて実践的に研究する傍ら、学内の聴覚障害学生支援担当として、支援体制の調整や全学的普及に取り組む。



末森明夫氏（独立行政法人産業技術総合研究所）

1歳8ヶ月で聴覚障害が判明。以来、聴覚口話法で教育を受ける。大学に入って手話に出会い、2年次より手話通訳を利用開始。その後、関東学生情報保障者派遣委員会（現 関東聴覚障害学生サポートセンター）を立ち上げ、手話のできる学生を相互に派遣する体制を構築。3年次以降は手話通訳とノートテイクの両方をほぼすべての授業時間にわたって利用。現在は、遺伝子研究に従事し、国内外の学会ならびに研究発表等の場で手話通訳を利用。2児の父でもあり、コミュニティ通訳の利用経験も豊富。



金澤貴之氏（群馬大学 障害児教育講座 准教授）

聴者。障害学生支援室副室長ならびに聴覚障害専門教員として、学内の支援体制構築に従事してきた。他大学が文字を中心とした支援を行っている中、当初より手話通訳による保障を重視し、手話通訳技術を有する職員を雇用。現在はろう者のマネージャー1名、手話通訳者3名の4名体制により、支援の質にこだわった体制づくりを進めている。大学院修士課程在籍中より手話の学習を開始。専門は聴覚障害教育。



白澤麻弓氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター 准教授）

聴者。手話通訳士。手話や情報保障についての授業を担当する傍ら、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局長を併任。大学1年次より手話の学習を開始。大学時代は聴覚障害学生とともに学内の支援体制構築に取り組んできた他、関東聴覚障害学生サポートセンター事務局長として、関東地区の大学に対する支援も担当。現在は、手話通訳をはじめとする情報保障に関する研究に従事。企画者側の立場で手話通訳を利用することも多い。

吉川／みなさん、こんにちは。今日は研究職に携わる聴覚障害関係の精鋭4名にお集まりいただきました。このうちお二人は、ろう者でご自身も大学院等の専門性の高い分野で手話通訳を利用されてきた方々です。また、残りのお二人は手話のわかる聴者であり、かつ大学教員として数多くの場面で手話通訳を利用されてきています。手話通訳というのは、ろう者と聴者の相互をつなぐやり取りになりますので、両方の立場から大学における手話通訳に望むことを語っていただければと思います。

高等教育場面における手話通訳像とは？

吉川／早速ですが、まず高等教育現場における手話通訳の理想像について、コミュニティ通訳との違いや皆さん自身が手話通訳者に求めていることをお話しいただけますか？

松崎／自分が求める手話通訳像についていくつか。まずは論理的思考力がしっかりしていること。論理的思考力の弱いコミュニティ通訳¹者は多いと思います。話についていけなくなると開き直ってまとめて通訳する、あるいはわからなくなると考えることを諦めて順を追って聞いたまま通訳することがあり、大変困りましたね。大学の手話通訳では、その時々ではわからなくても論の展開を追ったり振り返ったりすることで話者の主張や議論を整理

¹ コミュニティ通訳

聴覚障害者に対する医療、福祉及び司法など様々の公共サービスの場での通訳であり、それらを概して「コミュニティ通訳」と言う。

することが求められると思いますね。そうした作業を続けられるタフさも必要ですね。2点目に、学問的な内容を理解しようと積極的に勉強して下さる事です。そのためには研究会や授業に参加すること。私の講義や卒業論文発表会にも手話通訳者が勉強のために出席しています。そして3点目。これは理想的でもあるのですが、ろう者である研究者と一緒に仕事をする覚悟を持ってくれること。例えば専門用語や論理的な説明を理解するためには、簡単に打ち合わせをただけでは足りない。日々研究会等に参加してもらいながら、手話表現を検討したり、専門分野独自の言い回しやその分野に適した通訳方法を作り上げる必要があると思います。こうした関係も持てる通訳者がほしいですね。

末森／コミュニティ通訳と大学のようなアカデミックな場における通訳（以下、アカデミック通訳²）の一番の違いは、**アカデミック通訳**には人格が求められないところだと思います。コミュニティ通訳は、手話通訳者がろう者に寄り添い、彼らの人生を守り、ろう者とともに活動していけるかが重要な要素となります。アカデミック通訳の場合、これらがまったく必要ないというわけではないですが、比重が小さくなるのではないかと思います。仕事重視で、人としての繋がりは薄い。だからこそ求められるのが通訳技術です。コミュニティ通訳の場合は、技術が十分でなくてもろう者とともに活動できる方であれば何とかなりますが、アカデミック通訳の場合、通訳技術が十分でない方は遠慮いただけたらと思います。

金澤／基本的にはお二人のご意見と同じです。特に論理的思考について、他に付け加えるとするならば、大学講義の特徴の一つに「**判断保留**³」という点があげられます。ある事態に対して、事実のみを述べ、その良し悪しについて言及しないような話し方のことです。もちろん先生によって、これを多用するかどうかは異なりますが、大学講義の場合、こうした判断保留が多く用いられる傾向があると思います。しかし、こうした表現を「私は…と思う」というような形に通訳してしまう例が多いのではないかと思います。これでは、根本的に大学講義というものを理解することができません。アカデミック通訳の場合は、こうした客観的な説明をいかに再現できるかが重要になるかと思います。



² アカデミック通訳

聴覚障害者に対する大学・短期大学等の高等教育機関における通訳。専門用語の理解や論理的思考力等、学術的な原理と技術が求められる。

³ 判断保留

現象学の用語で「エポケー」という。自分の持っている価値観では判断ができない事柄に出会ったとき、その事柄への判断をとりあえず保留して様子を見たり実際にやってみる態度のこと。

白澤／私も同感です。通訳をする際にこうした「学問的な重要性」を理解して訳しているかは非常に重要だと思います。今、金澤先生が「判断保留」の例をあげられましたが、一般的な講演会では、話の命題つまり「何がどうなったのか」がわかればそれでいいと思います。でも学問の世界では、その事象に対する話者の態度⁴が重要です。先ほどの例のように、単に客観的な事実を述べているのか、それともその事実に対して批判的な立場でいるのか、あるいは教員自身もそれに同調しているのか、これらものごとに対する見方がわからなければ、学問世界の入り口に立つことができません。ですから、通訳者にはこうした情報を敏感に感じ取り、これが学問を学ぶ上で重要なのだと理解して訳して欲しいです。

他に、一般的な言い回しと専門用語の区別も重要です。特に、学問分野によっては一見聞き慣れた一般名詞であっても、専門用語として使われる場合があります。この場合、その名詞には特別な意味が付与され、厳密に定義された用語として用いられるため、他のことばに言い換えることができません。通訳者がこれを混同し、一般名詞のように訳してしまうと、聴覚障害学生はその世界で使用されている用語を身につけることができません。

こうしたことを考えると、手話通訳者には確固たる日本語の力が必要です。手話ができるのは当然ですが、日本語の言語力がなければ学問世界での通訳は難しいかと思います。



松崎／先ほど通訳者には論理的思考が求められると話しましたが、教員が話をする際に、教員一人一人異なる論理展開の特徴を持っていると思います。先に結論を話す、一つ一つ事実を積み上げていって最後に結論に結びつけるなど、話し方の特徴はさまざまです。こ

⁴ 事象に対する話者の態度

事象は出来事や現象を意味する。授業や研究では、事象に対して話者はどのような見地・立場として対峙しているのかという情報も重視される。

うした教員の論理展開の特徴もつかんで伝えているのかも考える必要があると思いますね。もし手話通訳者に講義の論理的な展開がわかるように通訳してほしいという要望を出した場合、学生が理解しやすい論理展開に変えて伝えたとしましょう。しかし、これでは学生にその教員の論理展開が伝わってこないわけですから、学生教育の観点からこうした論理展開の特徴の伝え方をどうするかも重視する必要があるのではないのでしょうか。

金澤／その通りですね。私自身の経験ですが、大学で音声認識の研究をしたときに、当時在学していたろうの大学院生二人にこの字幕を見てもらいました。すると、二人とも「金澤先生の話は、いつも回りくどいとみんなが話していたけれど、その理由がやっとわかった」と言うのです。彼らはいつも手話通訳を通して私の話を聞いていたのですが、通訳者がわかりにくい話を理解しやすい形に直して通訳していたんですね。これでは、教員の論理の道筋が伝わっていない可能性があるということですね（笑）。

使用手話に対する好み

白澤／皆さんのお話を聞いていて興味深いなと思ったのですが、「日本手話⁵を使って欲しい」等のニーズは一つも出てきませんね。本事業の中で、学生の手話通訳に対するニーズを調査したときに、学部生から修士課程の院生、博士課程の院生と学問的なレベルが高度化すればするほど、日本手話による通訳ニーズが高まるという結果が出ています。でも、皆さんのお話を聞いていると、これが単なる手話の好みの問題ではないということがよくわかります。これまで話に出ていたような論理性をきちんと伝えて欲しいというニーズが第一にあり、これを可能にするために結果的に日本手話の要素が必要となるだけで、本質的には表出する手話のタイプがどうこうという問題ではないということですね。

金澤／そうですね。使用手話の好みは学生によると思います。ただ、一番困るのは「日本手話っぽい」通訳です。「日本手話もどき」と言っても良いかもしれません。通訳者の中には、身振りやジェスチャーがたくさん入っているのが日本手話だと勘違いしている人もたくさんいると思います。でも、これでは論理は伝わりません。文の区切れがはっきりとわかり、文と文の関係性が表現されていないと内容が理解できません。ですから、中途半端な日本手話（その実、日本手話の文法も欠けているもの）で論理が曖昧になるくらいなら、日本語対应手話でもいいので、日本語を正確に伝えた方がいいのかもしれないと思います。ただし、日本語対应手話とは言っても、単に通訳者の頭の中で想起した日本語に手話の単語をつけただけでは、ろう者から見たら文のつながりも切れ目もわからず、元の日本語を

⁵ 日本手話

ろう者が用いる視覚言語。手の形・運動・位置などの手指動作や、眉、視線、上体、口などの非手指標識（NMM）で意味を伝える。後者の NMM も、副詞などの語彙的な機能や疑問文や過去形などの文法的機能をする。

想起することもできません。文として完成されたものがろう者に伝わるのが大事だと思います。



松崎／私も同感です。手話通訳者の通訳を見てみると、日本語対应手話から日本手話に近づくにつれ、日本語談話の中にある論理展開がより視覚化されていくように思います。例えば、日本語対应手話で表している場合、日本語口形と手指動作で伝えるのですが、そうして表現された手話は、日本語に堪能な聴覚障害学生でも単語が羅列しているように捉えられると思います。そこで、日本手

話で見られる文法としての頷きや間などが加わることで、文章の区切りがわかる。また、視線の方向、あるいは語彙の方向や表現位置などの変更などが加わると、空間の広がりが出て単語あるいは句の関係で何を言いたかったのかがつかめるようになります。他にも「・・・という意味（／意味／）」とか「・・・かもしれない（／わからない／）」とか「・・・である＋指さし（／PT-3／）」などが文末に入る手話構文があると、論理展開が捉えやすくなることもありますね。このように日本語対应手話でも通訳者が論理展開をしっかり押さえていたとしても訳出される表現から把握できる論理は限られるので、日本手話の文法的な要素を多く効果的に用いることで論理をより緻密に把握しやすくなると思いますね。

白澤／表現技術のバリエーションが広がるほど、より緻密に内容を伝えることができるということですね。あわせて、翻訳技術についても同じことが言えるかもしれませんね。私は、博士論文で手話通訳者が用いている翻訳技術の内容について研究したのですが、手話通訳を行う際に手話通訳者が用いている技法は6つあることがわかっています。同等、言い換え、付加、省略、圧縮、原語借用⁶です。上手な通訳者は、このうち圧縮を使っている場合が多いのですが、松崎先生の言う「単語の羅列」の場合、「同等」か「言い換え」で伝えることになります。つまり、日本語にそのまま対応した手話を用いるか（同等）、日本語のことばを別のことばに置き換えるか（言い換え）くらいしかできないわけです。だから、

⁶ 同等：日本語に対応した手話単語などを用いてほぼ等しい内容で訳出されているもの

言い換え：通訳される言語（起点言語）の語が別の語に言い換えられているもの

付加：起点言語に含まれていない情報が目標言語で訳出されているもの

圧縮：起点言語で表現されている複数の語を、少ない語で訳出しているもの

省略：起点言語に含まれる情報で、目標言語として訳出されていないもの

原語借用：指文字や口形、漢字に対応した手話を用いて原語をそのまま表しているもの

（参考文献：白澤麻弓（2003）日本語―手話同時通訳の評価に関する研究、博士論文、筑波大学。）

結果的に同じ時間に伝達できる情報量が少なくなります。でも、情報量が多いと感じる通訳者の場合、「付加」ではなく「圧縮」が多い傾向にあるんです。「圧縮」とは、手話単語は一つでも視線やNMM⁷等を共起させることで、少ない単語でより多くの意味を表す表現方法です。こうした表現を用いることで、韻律情報などのよりきめ細かな情報が伝達できるのかなと感じました。

末森／今の話に加えて、さまざまな手話通訳を見比べていると、**教員の論理展開にそって学生の気持ちをうまく引き出している**通訳者がいると感じます。例えば、教員が「こういうことが起こるかもしれない」と言ったときに、通訳者が「こういうことがみんなにも起こるかもしれない（／PT-2（左から右へ）／起こる／わからない／PT-2／）」と訳すことで、学生は「そうそう、自分にもあるかもしれない」と感じます。これにより、ろう学生側も教員が意図した講義の論理展開にのれるわけです。こうした工夫は見ていてわかりやすいです。

吉川／ありがとうございます。これに関連して、もう一つ気になっているのは、どの場面でどんな通訳を選択するかということです。例えば、単純に授業の内容がわかればよいという場面では、見ていてわかりやすい手話通訳のタイプを選択したいと思うかもしれませんが、しかし、ゼミや研究発表など、自分が主体的に発言をしなければいけない場面では、見ていてわかりやすいだけでは不安が残りませんか。

白澤／翻訳の信頼性と、場面ごとの優先順位の違いということですね。手話としてわかりやすい表現をしようとする、必ず手話通訳者による翻訳が入りますよね。日本語と手話は異なる言語である以上、翻訳は避けられません。でも、その翻訳によって必ずしも言語間の等価性⁸が保たれるとは限らないので、通訳者の判断をどこまで信頼できるかという問題が出てきます。もし**手話通訳者の判断が非常に的確で、話し手の情報を正確に伝えているという安心感があれば**、どんな



場面でも信頼して任せることができます。でも通訳を見ていて、これは翻訳のしすぎだと

⁷ NMM

非手指標識。Non-Manual Making の略。眉、視線、上体、口など手指以外の動作で表現される文法要素。NMM で表される文法には、yes/no 疑問文、wh 疑問文、過去形、否定、接続詞（順接や逆接）などがある。

⁸ 言語間の等価性

起点言語を逐語的に直訳することを意味しているのではなく、起点言語の内容、ニュアンス、場面に応じた言葉使いの特徴を正確に訳出できること。

か、先生の価値判断とは違うものが入っていると感じると信頼性が低下します。そして、自分の評価につながるような場面では、見やすさよりも信頼性の高い手話通訳者を選択する形になるのではないのでしょうか？

末森／その信頼性というのを数値化することはできないのでしょうか？

白澤／翻訳の前と後で文章を示し、どこまでなら許容できるのかを厳密に検証して、この結果を通訳者団体で共有していくことはできると思います。ろう者が100%許せるのはどこまでで、どこから揺らぎが生じるのか？どんなろう者がどんな翻訳を求めているのかなどを細かく明らかにしていく必要があると。

専門知識と論理伝達

吉川／ありがとうございます。これまで、論理展開の伝達について話が出てきていますが、手話通訳者自身が持っている知識と論理の伝達にはどのような関係があると感じますか？例えば、私の経験では知識のある通訳者が必ずしもわかりやすい通訳をしてくれるとは限らないと感じることがあります。もちろん一般的には専門知識があれば、通訳にも良い影響があるのだと思いますが、通訳者によってはたとえ知識のない分野であっても、非常にうまく論理を伝達してくれることがありますよね？これってとても不思議だなと感じるのですが、いかがでしょうか？

金澤／そうですね。ただ大事だと思うのは、内容を聞いて理解できるレベルの話かどうかということだと思います。専門用語の数が少なく、ある程度他分野の人が聞いても理解できる内容であれば、たとえ手話通訳者に専門知識があっても発揮されません。そのため、手話通訳者の専門知識が生きてくるのは、かなり内容の深い講義ということになると思います。それから、内容によっては専門知識が邪魔をする場合もあると思います。予備知識があるがために、先生の論理が理解できない場合です。特にアイロニカルな話をしている場合には、こういう傾向があるかもしれません。

白澤／なるほど。ただ、確かに吉川さんがおっしゃるとおり、内容が難しくなっても「上手い通訳者は上手い」ということはありますよね。こうなると、専門知識よりも他に手話通訳者に必要なものがあるのではないかと感じますが、どうでしょうか？

松崎／専門知識というのは、一般にはある研究分野で蓄積されてきた知識体系のことを指すと思うのですが、これとは別に未知の分野でもこういう知識世界があるのかと柔軟に吸収できる能力（知識）もあるように思います。論理の伝達とはちょっと違うけれど、学術

的内容に対応できる通訳者の中には、例えば、専門用語には定義があるのだから厳密に調べておくとか、仮説を立て検証するのが科学研究であるとかそうした姿勢があって吸収できているなど感じることもあるのです。自分の知らない分野でも、資料を読み、どのように議論されているか、この言葉はこういう文脈で使うのかと理解していけるような。専門知識だけでなく「研究」というものに対する論理的理解力も関わっているのではないかと思いますね。

白澤／ということは、たとえ専門知識がなくても自分の持っている論理力でカバーしているということですね。逆に専門知識のある通訳者であっても、こうした論理的理解力がなければ重要な情報が伝わらない、と。

論理を伝達すること

吉川／ありがとうございます。ここまで、論理の伝達が大事という話をしてきましたが、では、その論理を伝達するためにはどうすれば良いのでしょうか？そもそも論理って一体何なのでしょう？もう少し突っ込んで考えてみたいと思いますがいかがですか？

金澤／私も説明が難しいなと思いながら聞いていました。論理というのは、ものや事象のつながりですね。AならばB、BならばC。この2つがいえるならば、AならばCと言える、という形式論理のことだと思うのですが。でも通訳する上で一番大事だと思うことは、やはり「判断」ではないでしょうか？誰の判断なのかをきちんと正確に伝えられるかというところ。



白澤／話者の態度ということですよ。モダリティ⁹。

末森／そうそう、モダリティやプロソディ¹⁰の問題が関係あると思います。ちょっと外れるかもしれませんが、興味深い研究があります。同じ内容の文章を、わざとフット¹¹とリズムを変えて提示したところ、その言語に合致したフットとリズムが用いられる場合は、聞いていてよくわかるのですが、フットやリズムがずれると意味がわからなくなるそうです。すっと入ってこないのです。つまり、正しい語彙・文法を用いて文章を提示しても、プロソディやモダリティがずれていると、論理が理解できなくなってしまうわけです。



昔、私も研修会でものすごく高速で対応手話を表す手話通訳者に会ったことがあるのですが、扇風機のように速く手が動くのにも関わらず、見ていて非常に良く理解できたんです。ほとんど完璧に講師の話を再現していたのだと思うのですが、今思うとおそらくフットやリズムが正しかったのだと思います。これに対して、ゆっくりな対応手話でもフットが合わないとう理解できないのかと。

金澤／フットというのは、いわゆるリズムに近い概念ですよ。末森さんのお話では、日本語対応手話を使って表す場合、手話か日本語かどっちつかずのフットになるよりは、日本語のフットを用いて頭の中で日本語が想起される表現をした方がいいということでしょうか？

末森／そうです。この研究成果に基づくと、そういう可能性はあると思います。

白澤／日本語のリズムということですね。他に、プロソディやモダリティによって伝えられている内容を具体的に示すとどうなるのでしょうか？こうした情報は、よく雰囲気とかニュアンスなどということばで片付けられてしまいがちですが、もう少し明確に定義づけられればと思うのですが。上手い通訳者を見ていて内容がよくわかるというからには、上手い

⁹ モダリティ

言語学用語。話している内容に対する話者の判断や感じ方を表す言語表現。

¹⁰ プロソディ

言語学における韻律情報。音声情報で表れる抑揚あるいは音調、強勢、音長、リズムなどを含み、これらは当然文字では現れてこないものである。

¹¹ フット

言語学用語。言語にはリズムがあり、言語ごとに異なるリズムをもっている。リズムのひとまとまりのことを指す。

通訳者が伝えている「何か」があると思うのです。

松崎／そうですね。そのリズムに関して言うと、先ほど話をしていた「…意味」などの構文によって論理展開がクリアになっているだけでなく、「動き」の緩急等からも話の重要度が伝わってくる印象はあります。さらりと話していることなのか、重要だと強調して言っているのかなど…。

金澤／なるほど。ろう学生が手話通訳を希望する理由の一つに、話者のプロソディつまり今松崎先生からご指摘のあった感情や強弱といった表現をきちんと知りたいからというのがあると思います。単に、授業内容の情報だけ受け取ればいいのであれば、パソコンノートテイクでかまわない。でも、パソコンノートテイクではなく、手話通訳がほしいというろう学生の多くは、内容に対する価値付けを知りたいというのですよね。上手い通訳者はこうした情報を伝えているということですよ。

吉川／そうですね。以前、ノートテイク養成講座で先生をお呼びして模擬講義を受けたときに、先生がすごくおもしろい話をされたんです。周りの学生はずっと笑いながらノートテイクしているのですが、技術のある方のノートテイクを見ても面白さが今ひとつ伝わらないのです。このときは、手話通訳もついていましたが、手話通訳の場合、通訳者が交代するたびに自分も周りも笑えるか笑えないかが変わります。このノートテイクと手話通訳の違い、そして、手話通訳の技術の差はどこにあるのかと感じました。どの通訳者もそれなりの技術を持っていられるのですが、結果として伝わる情報が違うわけです。



白澤／そういうことってありますよね。その場合、内容よりも「面白さ」を伝えなければならないのに、「何がどうなったのか」という内容だけを伝えているからわからないんだと思います。大学の場合も同じで、淡々と内容のみを伝える通訳者の場合、見ていて、「ふーん」と思うだけで、授業の面白みは伝わってきません。前に話のあった、命題だけつかんで終わりというように。でも上手な手話通訳者の場合は、「ああなるほど、ということね」「そうそう、そうだよ」と、見ている人の思考を動かす力があるかと思います。学問的思考が喚起されるということです。ここに寄与するのが、やはりプロソディでありモダリティになるのかなと思います。

末森／これを明確にするためには、語彙情報と文法情報、プロソディの三つを分けて分析するといいかもしれませんね。いくつかの通訳を比較して、語彙情報がどのくらい脱落しているのか、論理を伝えるための文法情報がどのくらい伝わっているのか、そしてプロソディなどの付加情報がどのくらい入っているのかと。

松崎／他に、「論理」というものについても、もう少し細分化して考える必要があるかもしれませんね。判断保留の他に、さまざまな判断レベルがあるかと思いますが、これを段階分けしていけば修士や博士の学生がどのあたりの区別を必要としているかがわかってくるかもしれませんね。

金澤／なるほど。判断レベルという言い方はわかりやすいですね。良し悪しを判断しない「判断保留」の他にも「…かもしれない」「…と思う」「…べき」などいろいろなレベルがありますから。研究者は、このあたりを細かく使い分けていくので、通訳者にもそれを判断してほしいですね。

これまで手話通訳というのは、表現された手話が言語として成り立っているかという視点で評価されることが多かったと思いますが、今日の議論で感じたことは、それより意味のつながりやそれに対する価値判断が正しく伝えられているかを見ていくことが重要だということです。これにはどの言語を使うかというのは関係ありません。誰が、誰にという論理的なつながりと、それに対する話者の価値判断をいかに伝達していくかです。

松崎／今思ったことですが、それに加えて、教員が話す一連の談話にどのような構造があるのかをあらかじめ想定できるかも関わるのかもしれませんが。講義談話の例として、最初に問題提起なり仮説なりがあって、どのような観点でアプローチするのか、どのようなことが言えるかというような道筋なり構造なりそういうものがありますよね。講義で手話通訳をするにあたって、どのような談話構造なのかを想定して臨むか、わからないまま臨むというのでは違ってくると思います。これは「リテラシー」の観点からも説明できると思います。リテラシーは、認知心理学的にトップダウン処理とボトムアップ処理の両方が相互作用していると言われています。トップダウン処理は、全体的な談話構造を想定し、話全体を聞きながら構造を捉える力。ボトムアップ処理は、一つ一つの語、句、文章などを積み上げて理解していく力。論理的なつながりやそれに対する話者の価値判断は、積み上げて理解していくのであればボトムアップ処理に近いのですが、講義全体の談話内容を構造的に把握するのはトップダウン処理になると思います。トップダウン処理とボトムアップ処理はいわば「車の両輪」のようなもので、打ち合わせで綿密に全体の談話構造を把握しておけば、講義中の手話通訳で見通しを持ちながら論理的なつながりや話者の価値判断を考えやすくなるのではないのでしょうか。とすれば、私たち教員の手話通訳者に対するサポートのあり方（打ち合わせの持ち方）も今後考えねばならないでしょうね。

今後の展望—さらなる飛躍に向けて

吉川／どうもありがとうございます。今日の議論で大学の手話通訳に求められるものが見えてきたように思います。最後に、今後の展望についてお話しいただけますか？

金澤／これまでずっと PEPNet-Japan に関わってきて感じるがあります。それは、事務局長である白澤先生には、やはり「ろう者にとって手話通訳は必要不可欠な手段である」というこだわりがあるのだろうということです。そして、そんな風に手話通訳にこだわられるかどうかが大学全体の支援の質を分けることになるのだと思います。私自身、手話通訳には強いこだわりを持っていますし、そういう思いで大学の中での体制構築を進めてきました。

けれども大学の現場を見渡してみると、まだそうした考えは一般的ではありません。「書けばよい」「パソコンノートテイクで十分」というのが一般的な感覚でしょうか。もちろん、手話通訳には予算が必要で、本当に良い通訳をしてもらおうと思ったら研修にも時間をかけなければなりません。加えて、すべての手話通訳者が大学で十分な通訳をしてくれるわけではありませんから、ノートテイクの数倍の予算や労力をかけて、なおかつろう学生から「わからない」と言われたら、パソコンノートテイクの方が良いと思ってしまう感覚もわからないでもありません。でも、ろう者にとって本当にライブ感のある講義を味わってもらいたいと思ったら、それが実現できるのは手話通訳しかありません。だからこそ、この手話通訳の重要性がはっきりと伝わるような冊子をまとめて欲しいと思っています。ぜひともがんばって下さい。



松崎／今日の議論で、高等教育の手話通訳で必要なものが何なのかという「定義」をもう少し詰めていく必要があるなと思いました。今後も科学的な手法でさまざまな分析をし、

高等教育で求められる手話通訳とはこういうものです、と納得できるような知見を得ていかなければならないですね。ちなみに今回の議論の趣旨とは少し外れますが、本事業で以前、日本語対応手話について、聴覚活用が可能な難聴学生にとっての手話通訳は何だろうと少し話したことがあります。今回の議論は、聴覚活用は困難な方の、ろう学生にとっての手話通訳であったと思います。難聴学生の場合、音声と併用する手話通訳を希望することがあるので、末森さんがおっしゃったようなプロソディの問題も含めてどうすればわかりやすい通訳になるのかなと思いました。これもいずれ検討されるでしょうね。

末森／今日参加して「なるほど」と思う発見がいくつかありました。ただ、手話通訳を分析するには、言語学的な技術に限界があると感じました。生成文法や認知心理学など、いろんな手法を借りて研究を進めるとより深く理解できるかと思います。そうした意味で、リサーチマネージメント、プロジェクトマネージメントが今後の課題だと感じました。また、こうした研究を行う際には、研究手法の幅を広げたほうがいいと思います。今、ここには比較認知研究が専門の研究者がいて、記述的研究を行っている人もいます。生成文法を使っている人はいないですが、より幅広い人を集めて議論するとさらに面白くなるのではないのでしょうか。三つ目にモードの問題があります。今回の議論でも日本手話と対応手話の話がありましたが、いずれも非常に重要だと思います。どちらかを除外するのではなく、いずれも研究対象として見ていくことが重要かと思います。

白澤／さきほど、金澤先生が手話通訳へのこだわりという話をされていましたが、その通りだと感じました。ライブ感のある通訳、教員の論理が細部まで伝わってくる通訳。本当に手話通訳がほしい学生が求めているのは、そういう手話通訳だと思うんです。単に情報を伝えるだけなら、パソコンノートテイクで十分です。でも、パソコンノートテイクで伝わらない情報があるからこそ、それを伝えられる手話通訳者が必要で、そのレベルの手話通訳ができなければ、手話通訳を利用する意味がありませんし、高等教育における手話通訳ニーズも満たされることがないのだろうと思います。

大学というのは、単に知識を吸収することだけを目的にした機関ではありません。自分でものごとを考え、新たな英知を生み出すことのできる人材を育てる場、それが大学というところです。だからこそ、最高級の教育を保障できる環境が必要であり、それができないうちは、本当の意味でのろう者の高等教育は達成されないのだろうと思います。

だから、手話通訳にはこだわりたいのです。ろう者が今後もっと研究者として大学に残り、新たな英知を生み出す人材になるために。また、多くのろう者が大学で培った研究的思考を元に社会に貢献し、新しい知識・技術を発信していくためにも。

吉川／皆さんのお話を伺って、高等教育の手話通訳にもやっと光が見えてきた気がします。今後、まだまだ研究が必要な分野ではありますが、こうした取り組みは続けていきたいと思いますので、ぜひご協力いただければ幸いです。今日は本当にありがとうございました。



第2章

聴覚障害学生のニーズとは？



前章では、高度専門領域における手話通訳とは何かを座談会を通して考えました。それでは、実際に大学で学んでいる聴覚障害学生は手話通訳に対してどのようなニーズを持っているのでしょうか。



本章では、日常的に手話を使用する4人の聴覚障害者の意見交換会を、これまでの本事業のデータに基づき構成しました。4人の属性は、学部生から博士課程修了者までさまざまです。いろいろなタイプの手話通訳に対してどのような意見を持っているか見てみましょう！

意見交換会 概要

意見交換会では、聴覚障害学生の情報保障に対するニーズを明らかにするため、異なる特徴を持った手話通訳A、B、Cの3タイプを視聴し、これらをもとに学部生、修士課程修了者、博士課程在籍・修了者の属性の異なる参加者で、情報保障のニーズに関する議論を行いました。これにより、聴覚障害学生が望む通訳像を明らかにし、支援学生・通訳者・障害学生支援コーディネーターにはどのような対応が求められるのかを検討しました。

【意見交換会参加者】

		綾乃さん 	祥子さん 
学歴		学部在籍中（2年）	修士課程修了
手話習得時期		ろう学校中等部1年	大学1年
情報保障	パソコン・ドタイプ	大学1年	大学1年
利用開始時期	手話通訳	大学1年	大学3年
聴力・聴覚活用の状況		両耳 105dB 程度。 補聴器は装着しているが、基本スイッチを入れない。 必要な時だけ入れるといった使い分けをしている。	両耳 105dB 程度。 補聴器を用いて聴覚活用しているが、手話通訳を利用する際は基本的に手話のみで情報を得ている。

		洋介さん 	聡子さん 
学歴		博士課程 2 年	博士課程修了
手話習得時期		ろう学校高等部 1 年	大学 1 年
情報保障	パソコン・トテイク	大学 1 年	大学 3 年頃
利用開始時期	手話通訳	大学 1 年	大学 1 年
聴力・聴覚活用の状況		両耳 105dB 程度。 聴覚はほとんど使わない。 主に大学院のゼミで手話通訳を利用している。	両耳 100dB 程度。 聴覚を利用することもあるが、今回の通訳映像は音声なしで見た。

モデル手話通訳 概要

(1) モデル手話通訳の原文

今回のモデル手話通訳映像は、同一の起点談話をもとに 3 名の手話通訳者が通訳を行い、収録したものを使用しました。通訳した授業の原文（起点談話）は以下の通りです。

講義名：哲学

テーマ：福祉国家の優生学

福祉国家の前提になっているのは生の偶然性ですね。つまり、私たちが生きている人生ではどういことが起きるかわからない。順風にいっている人でも、えー、交通事故にあつて障害を被るかもしれない。あるいは何らかの形で、例えばですね、専業主婦で万歳だーなんて思っていたら、離婚されて、シングルマザーで生きていかざるをえない。という風になる場合だって起こる。あるいは男性だって失業が起こる、という、そういうその生の偶然性ですね。で、これが、あるから、生の保障をしよう、っていうことですね。生のセーフティネットを作って、様々な社会保障をすることによって、その一、生の保障をしましょう、ということを行っている、っていうのが福祉国家ですね。

（２）各モデル通訳映像の特徴

今回参加者は、特徴の異なる３つの手話通訳を視聴しました。それぞれの特徴は以下の通りです。

手話通訳Ａ：教員の音声日本語の語順にほぼ忠実な訳出をしている。口形も、表出される単語に合わせてほぼ音声日本語通りにつけられている。

手話通訳Ｂ：基本的には教員の音声日本語の語順に沿って手話を表出しており、一部で空間活用・写像的な表現を用いている。

手話通訳Ｃ：教員の音声日本語の語順にとらわれず、日本手話の文法に沿って手話通訳を行っている。

それではここからは、それぞれのモデル手話通訳について、参加者が見てどのように感じたかを見てみます。各モデル手話通訳を語彙ラベルとキーとなる文法の要素で書き起こしたものを合わせてご覧下さい。なお、異なる特徴を持ったモデル通訳を収録するために、各通訳者には上記のような特徴に応じた通訳をしていただくようお願いしました。よって、必ずしも各通訳者が本来的に持つ通訳の特徴と一致するとは限りません。



語彙ラベルを
読むときのヒント

【表記について】

上の行が通訳内容に対応した原文の音声日本語、下の行が通訳した語彙ラベルになります。

例： 原文	「福祉国家の前提になっているのは生の偶然性ですね」
語彙ラベル	／福／FS（シ）／国／家／基本／ ^{M:セイノ} 生まれる／偶然／性／nod／

【語彙ラベルの意味範囲】

語彙ラベルとは、手話単語の日本語訳のうち代表的なものの１つをこの手話単語の見出し（ラベル）として、便宜的に記述したものです。手話における単語の意味範囲は、日本語のそれと必ずしも一致しないため、語彙ラベルは使用された手話の正確な意味を示すものではありません。例えば、／わからない／は、通訳の中では「～かもしれない」の意味で使っています。

【記載のルール】

語彙ラベル及び補足のための記号は以下のルールに則り記載しています。

改行	文章の区切り
/○○/	語彙ラベル及び文法要素の1つの単位を示す
/FS (○○) /	指文字
/nod/	うなずき。本冊子では、句や文の区切りの役割を担う場合のみ記載。
/PT-1/	一人称への指さし
/PT-2/	二人称への指さし
/PT-3/	三人称への指さし ただし、/PT-3 (○○) /の場合は、カッコに示す特定の三人称を指している。カッコ書きが特にならない場合は、任意の手話空間を指している。
(○○○)	補足説明
(能動)(受動)	(能動)は自分が行為者となる単語表現の基本形であり、(受動)は行為を受ける表出である。例えば、/クビ(能動)/は「クビにする」という単語表現の基本形であり、/クビ(受動)/は、「クビになる」という受動の意味になる。
(板書)	教員の板書への指さしをさす。今回の収録時には「生の偶然性」という語が書かれている。
<u>RS:○○○</u>	リファレンシャルシフト(※)。○○○は何の立場にシフトして表現しているかを表す。 ※リファレンシャルシフト(Referential Shift)。役割明示指標。手話の話者が1人で何人もの人物(話し手)の役割を担う表現をする。ある人物から別の人物へ役割が変わる時の主な動作は、視線の向きである。
<u>M:○○○</u>	口形(マウシング[mouthing])。日本語から借用した口形で、専門用語などについているもののみ記載。
右 中央 左	表現している位置

「福祉国家の前提になっているのは生の偶然性ですね」

／福／FS（シ）／国／家／基本／M:セイノ／生まれる／偶然／性／nod／

①

「つまり、私たちが生きている人生ではどういことが起きるかわからない」

／私たち（PT-1 側に弧を描くように半周）／生きる／（間）／人生／内／起きる／何／わからない（「かもしれない」の意）／

「順風にいっている人でも、えー、交通事故にあって障害を被るかもしれない」

／例／スムーズ／進む／でも／突然／交通／事故／障害（壊れる）／受ける／時／思う／

②

「あるいは何らかの形で、例えばですね、専業主婦で万歳だ一なんて思っていたら、離婚されて、シングルマザーで生きていかざるをえない。という風になる場合だって起こる」

／また／（間）／M:センギョウシュフ／専門／主婦／いる／でも／突然／離婚／M:シングルマザー／nod／独り／母／子ども／育てる／やる／必要／

「あるいは男性だって失業が起こる、という、そういうその生の偶然性ですね。」

／また／男性／仕事／クビ（能動）／ふらふら歩く／なる／生きる／偶然／性／ある／ある／

「で、これが、あるから、生の保障をしよう、っていうことですね」

／PT-3／だから／生きる／保障／必要／理由／です／PT-3（板書）／

「生のセーフティネットを作って、様々な社会保障をすることによって、その一、生の保障をしましょう、ということを行っている、っていうのが福祉国家ですね」

／M:セーフティーネット／安全／ネット／作る／nod／いろいろ／社会／保障／作る／結果／PT-3／生きる／保障／する／ある／nod／PT-3／福祉／国家／意味／ある／nod／

③

参加者のコメント



綾乃

音声日本語に沿った訳出なので、手話を覚えてた聴覚障害学生には良いかも。



洋介

はっきりした口形がついているので、口形を利用する聴覚障害学生にはわかりやすいね。



祥子

今回の通訳は、全体的に口形がついているものの、ところどころ口形がなくなって、とたんに内容がわからなくなっちゃった。口形をつけるなら最後まで全てつけた方がいいかも。あと、この通訳方法だと、一瞬でも目を離したら、一文ごっそり見落とすことになり、内容がわからなくなってしまうなあ。手話通訳Cは、わからない表現があったらその場で通訳者に聞いたり、「ノートに取るから待ってて！」と声をかけたりできそうだけど、手話通訳Aは口形での通訳が続いているため、話しているところに口を挟めなさそうで、ちょっとそれができない雰囲気。1コマずっと見続けるのはつらそう。



綾乃

主語が表現されていないけど、何の話だろう。

②は、スムーズに進むのは人？物？

③は、セーフティーネットを作るのは誰？原文の音声日本語だと主語がないことも多いけど、手話に換えるときは入れてほしいな。



聡子

先生の話す論理、話の背景が見えにくいね。手話通訳者には先生の話のポイントも伝えてほしいな。通訳序盤①で「生の偶然性」の“生”にあたる手話を／生まれる／と表しているけれど、先生が言う「生の偶然性」の意図は／生きる／中での偶然性。「生の偶然性」はこの講義のキーワードだけど、／生まれる／という手話語彙を選択したことによって、その後の論旨をつかむのに混乱しちゃうかも。



洋介

単語の羅列のようだなあ…。例えば③の通訳例で見ると、セーフティーネットと社会保障は作られるものとして並列になっているように読み取れるけど、原文を読んでみると、作ったセーフティーネットを使って社会保障を行う、という構造なんだね。原文にある「てにをは」が抜けた単語の羅列から、論理をつかさどる「てにをは」を推測するのは聴覚障害学生の負担が大きいきし、間違った解釈をしてしまいそう。聞こえたそのままを出せば伝わると思われがちだけど、実は音声日本語と手話の特徴の違いを踏まえた上で論理展開をそのままにして通訳をしないと、先生の意図が正確に伝わらないんだよね。

手話通訳B

「福祉国家の前提になっているのは生の偶然性ですね」

M:フクシコッカ M:ゼンテイ M:セイノグウゼンセイ
／福／国／家／前／基本／考え／方法／生きる／FS（ノ）／偶然／性／nod／

「つまり、私たちが生きている人生ではどういことが起きるかわからない」

／まとめ（「つまり」の意）／私たち（PT-1 側に弧を描くように半周）／生活／人生／何／起こる／起こる／わからない（「かもしれない」の意。以下同様）／

「順風にいっている人でも、えー、交通事故にあって障害を被るかもしれない」

RS:順風にいっている人
／スムーズ／生活／できる／人／事故／障害（両腕を切る）／障害（壊れる）／
起こる（上体を前方に出す）／（間）／わからない（上体を引く）／nod／

「あるいは何らかの形で、例えばですね、専業主婦で万歳だ一なんて思っていたら、離婚されて、シングルマザーで生きていかざるをえない。という風になる場合だって起こる」

M:センギョウシュフ
／また／何／方法／例／専門／主婦／万歳／楽／楽／良い／思う

RS:専業主婦
／でも／（首振り）／離婚（女性は固定、男性を離す）／nod／独り／子／一緒
／生活／行く／必要／nod／色々／問題／起こる／起こる／時／ある／nod／

④

⑤



聡子

原文の「順風にっている人でも、えー、交通事故にあって障害を被るかもしれない」が、通訳者の④のところの訳出を見ると、生の偶然性によって障害を負うのは自分であるように読み取れるね。でも本当は、先生は、生の偶然性は自分だけに限定せず誰にでも起こりうることだと言いたいはず。自分に起こるように表現してしまうと、論理が正確に伝わらなくなってしまうのよね。

指さしやRS（リファレンシャルシフト）による主語の明確化は、論理を正確に伝える上で重要だけど、間違った主語を伝えてしまうと大変！



洋介

この先生は原文を見ると、結論の部分と、それをわかりやすく説明するための例え話（交通事故の例・離婚の例・失業の例）がはっきり分かれているね。でもこの通訳だと見ていて区別しにくいな。このあたりは論理展開の理解に直結する部分なので、ぜひはっきりと伝えてほしいところ。

あと、例え話の中に挿入されている「あるいは何らかの形で、」の訳出が、⑤のように音声日本語の語順通り／また／何／方法／と表現されて意味がよくわからなかった…。

手話通訳C

（講師は無言で板書中）

／PT-3（板書）／nod／

「福祉国家の前提になっているのは生の偶然性ですね」

M:フクシ

／福／国／家／nod／運営／考え／方法／基本／ある／PT-3（板書）／

「つまり、私たちが生きている人生ではどうことが起きるかわからない」

／生きる／間／何／起こる／わからない（「かもしれない」の意。以下同様）／意味／PT-3（板書）／

「順風にっている人でも、えー、交通事故にあって障害を被るかもしれない」

RS:順風にっている人

／幸せ／生活／突然／交通／事故／（間）／不便／なる／わからない／PT-3／

⑦

⑧

「あるいは何らかの形で、例えばですね、専業主婦で万歳だーなんて思っていたら、離婚されて、シングルマザーで生きていかざるをえない。という風になる場合だって起こる」

RS:シングルマザー
／また／結婚／nod／仕事／不要／主婦／幸せ／思う／突然／離婚（女性は固定、男性を離す）／

RS:シングルマザー
／苦しい（上体を引く）／自分（口形「独り」）／苦しい／PT-3（苦しい）／
／子ども／世話／必要／ある／わからない／PT-3／

⑨

「あるいは男性だって失業が起こる、」

RS:男性
／また／男性／仕事／幸せ／仕事／（上体を前に出す、口形「ア」）／クビ（受動、上体を引く）／nod（上体を前に出す）／

RS:男性
／結婚／男／仕事／ない／手ぶら／ある／わからない／PT-3／

⑩

「という、そういうその生の偶然性ですね。で、これが、あるから、生の保障をしよう、っていうことですね」

／何／起こる／わからない／PT-3（板書）／

⑪

／言う／事／ある／PT-2（左から右に弧を描くように半周）／nod／みんな／あ

⑫

る／PT-2（右から左に弧を描くように4分の1周）／nod／だから／PT-3／

⑬

保障／する／PT-3（右から左に弧を描くように4分の1周）／

「生のセーフティネットを作って、様々な社会保障をすることによって、その一、生の保障をしましょう、ということを行っている、ってというのが福祉国家ですね」

RS:国 RS:国
／保障／国／助ける（受動）／もらう／PT-3（国）／nod／助ける（受動）／何

M:セーフティーネット M:セーフティーネット
／PT-3（助ける（受動））／nod／安心／ネット／ある／安心／ネット／nod／

RS:国
／例／いろいろ／社会／保障／言う／いろいろ／助ける（能動）／助ける（能動）
／する／制度／作る／PT-3／

RS:国
／だから／何／起きる／時／nod／大丈夫／大丈夫／固い／長い／生きる／でき
る／ように／保障／助ける（能動）／助ける（能動）／する／言う／国／福／FS
（シ）／国／家／PT-3（国）／

参加者のコメント



綾乃

⑦～⑪のように、／わからない（「かもしれない」の意）／が
冒頭の説明 → 例え話3つ → 結論 と5回繰り返し使われること
で、先生の意図がはっきりと伝わってきたよ。



祥子

私もそう思う。指さしも使いながら文末がはっきりと表現されて
いることで、内容がずっと入ってきたね。
原文の「という、そういうその生の偶然性ですね。で、これが、
あるから、生の保障をしよう、ってということですね」を、⑫のよ
うに訳出していることで、授業に参加している感覚が強くなって、
これも良かったです。でも、原文を見ると実際には先生が言って
いないようなので、ちょっと翻訳しすぎかな。迷うところ。



聡子

／わからない（「かもしれない」の意）／の繰り返しがわかりやす
かった点、私も同感。手話通訳Cは、日本手話の要素を用いて教
員の論理を明確に伝えているから、とてもわかりやすいね。手話
通訳A～Cの中で、大学での通訳に必要な要素を最も表している
と思う。



洋介

そうだね。例えば、
「という、そういうその生の偶然性ですね。で、これが、あるか
ら、生の保障をしよう、ってということですね」
という原文に対する訳出を比較すると、このような違いがありま
す。

【手話通訳A】

／生きる／偶然／性／ある／ある／
／PT-3／だから／生きる／保障／必要／理由／です／PT-3（板
書）／

【手話通訳B】

／生きる／偶然／性／言う／nod／
／PT-3／偶然／性／ある／だから／生きる／保障／必要／（間）
／言う／考え／方法／ある／nod／

【手話通訳C】⑬

／何／起こる／わからない／PT-3（板書）／
／言う／事／ある／PT-2（左から右に弧を描くように半周）／
nod／みんな／ある／PT-2（右から左に弧を描くように4分の1周）／
nod／だから／PT-3／保障／する／PT-3（右から左に弧を描くように4分の1周）／

手話通訳Aはほぼ音声日本語の語順通り。指示語「これ」も／PT-3／（これ、の意）に置き換わっているね。手話通訳Bは「これ」を／PT-3／偶然／性／と表出して、原文にない主語を補足することでわかりやすくしてる。さらに手話通訳Cは、教員の言わんとする「これ」にあたる状況を正確に把握し表出することで、最も論理が伝わる通訳になっているね。これは大学の通訳で重要なポイントだね。



聡子

ただし、専門用語は言い換えるのではなく、原語の日本語をそのまま借用して表してほしいな。専門用語は一般の言葉と違って、言葉の定義が厳密に決められているものが多くて、専門分野ではその言葉の定義を前提に話が進行するよね。だから、よかれと思って専門用語の意味をとって他の言葉に言い換えてしまうと、逆に教員の意図が正確に伝わらなくなってしまう可能性があるんだよね。

手話通訳Cは冒頭で二度板書を指さして、「生の偶然性」が重要語であることを聴覚障害学生に伝えていた点は評価できるわ。でも、後半の「生の偶然性」「生のセーフティーネット」は、意味はよくわかったんだけど、日本語そのものは伝わってこなかった。ただの偶然性でもなく、ただのセーフティーネットでもなく、“生の”偶然性でありセーフティーネットなんだよね。大学や大学院では専門用語やキーワードがたくさん出てくるから、このあたりは通訳するときぜひ気をつけてほしいところ。



洋介

あわせて、専門用語か一般的な言葉なのかの見極めも重要だね。難しいカタカナ言葉だけが専門用語なのではなく、一般的に使われている言葉やその組み合わせも、実はその分野では専門用語としての位置づけで使われていることがあるから。見極めるために十分な事前学習を行い、聴覚障害学生と打ち合わせを行ってほしいですね。

全体を通して



綾乃

私にとって情報保障とは、人と人とのつながり。手話通訳にしてもパソコンノートテイクにしても、情報の先には常に通訳者がいるのよね。両者が顔を合わせて確認しながらお互いの理解を深めていくことが大切なんじゃないかな。



祥子

聴覚障害学生がニーズを伝え、情報保障者がそれに応える形で一つの世界を作っていくためには、信頼関係はもちろん、聴覚障害学生自身が自分が欲しい情報はなにか、どういう方法で伝えてもらえればよりわかりやすいかといったニーズを知ることも大事。そして、聴覚障害学生がきちんと情報を得て、「大学でこんな勉強をした！」と胸を張って言えるような体験をしてほしいな。



聡子

私は情報保障を通して聞こえる人の世界と対等に関わりたいと思っているの。対等に関わるとは、情報を提供されるだけでなく自らも発信すること。そのときの情報保障の質が「だいたい伝わった」レベルでは対等性が実現しないんです。大学で研究者として働く私にとっては、聞こえる人と同じ内容が、漏れることなく正確に伝わるのが重要です。



洋介

通訳者の方の中には、日本手話を用いることで原文にあった日本語が伝わらず、ノートが取れなくなるのではないか？という心配をする人がいるかもしれないね。日本手話にせよ日本語対応手話にせよ、通訳で重要なのは、内容が正しく表現され、それを理解できるかどうかということ。普段日本手話の通訳を受けている学生であれば、手話通訳Aはそもそも内容が理解できないからノートがとれないし、理解できたとしても一瞬でも目を離すとその部分の話がわからなくなるから、ノートを取る時間が取れない。むしろ手話通訳Cの方が内容をスムーズに理解できるから、頭の中でノートを取る余裕が生まれると思うな。

ま と め

「聴覚障害学生は日本語力があるから、音声日本語をそのまま伝えるのが一番」「専門的な知識は聴覚障害学生の方が私よりも持っているから、とにかく聞こえたまま表出すればいい」と思って通訳したことはありませんか？手話通訳Aも、一見して元の日本語をそのまま伝えているように見える通訳ですが、今回の参加者のように手話通訳による情報保障を希望する聴覚障害者の場合は、手話通訳Aは文意がつかめない、教員の言いたいことが伝わらないという意見で共通していました。

なぜ伝わらなかったんだろう？

では、なぜ伝わらなかったのでしょうか？

それは講義を聞く上で重要な“誰が”“何が”にあたる主語が、原文の音声日本語通りに表出されたことで表出されなかったこと、論理展開を決定づける“てにをは”が原文の音声日本語から抜け落ちてしまったことなどが原因として考えられます。音声日本語は、主語がなくても聞けばイントネーションなどで主語を推測することが可能です。しかし音声日本語の語順通りに表すと、その情報が抜け落ちることになってしまいます。また、いわゆる単語の羅列のような状態になったことで“てにをは”に相当する情報が抜け落ち、聴覚障害学生は“てにをは”を穴埋め問題のように解いていかなくてははいけなくなります。

大学の先生は、自分の意見を言うばかりではありません。むしろ、様々な客観的事実を取り上げて説明し、それに対する教員自身の判断は断定的なときもあれば、保留するときもあり、判断そのものをしないときもあります。誰が（または何が）、どのような態度で、何を言っているのか。これが伝わらなければ、大学の講義そのものを理解することは非常に難しくなります。

どうしたら伝わるんだろう？

一方、好評だった手話通訳Cには、手話通訳Aにはない何があったのでしょうか？

特に大学院在籍または修了の参加者が重視したのが「教員の話す内容の論理や態度をいかに正確に伝えているか」でした。手話通訳Cはこれらの情報を日本手話の要素を巧みに活用しながら伝えていたと言えます。その技術については、具体的に第3章で解説します。

ただし、すべて日本手話にすれば良い、というわけではありません。大学の講義で多く用いられる専門用語は、言葉の意味が厳密に定義づけられていたり、ある特定の分野では一定のイメージを持って使用されます。よって、専門用語は別の言葉に置き換えるのではなく、原語を借用し専門用語のまま伝達することが、論理展開を正確に伝えるためにも重

要です。講義中に初めてその言葉が出てきたときは指文字、2回目以降は既存の手話単語に置き換えて表出する場合でも、手話語彙の選択に注意をはらう必要があります。

学部～博士課程のニーズの変化

また、学部、修士課程、博士課程と、学術的内容の高度化にともなって学生の要求する通訳技術も変化していくことが、これまでの研究から¹² 明らかになっています。学部生の場合は、はっきりとしたリズムで、日本手話の要素も強調して表現した通訳がわかりやすい傾向にあります。他方博士課程の学生は、話者の話す論理を正確に、ニュアンスまで知りたいというニーズがあり、これを実現できる日本手話の要素を自然なリズムで使った通訳の評価が高くなる傾向があります。修士課程の学生は、学部と博士課程の学生のちょうど中間の結果が出ました。

よって手話通訳者は、それぞれの段階で聴覚障害学生のニーズが変化することを念頭に置き、通訳を行う必要があります。

学部生の場合、4年間ずっと学部生の要求する通訳技術のみで通訳を提供するのではなく、話される内容を見極めて徐々に修士課程・博士課程の学生が求めるような通訳技術を織り込んでいくこともポイントです。本研究の過程である聴覚障害学生が「通訳を見ることによって、自分自身が手話を学んでいることに気がついた」と述べたように、通訳によって学生の手話力を引き出すことにより、聴覚障害学生がより高度な内容を学べるようになるのです。

手話通訳のポイント

以上のことから、大学での手話通訳においては、以下のポイントが重要になります。

- 教員の意図や論理展開を正確に伝達すること。
- 音声言語をそのままの形で伝達するのではなく、起点言語（日本語）と目標言語（手話）の特性の違いを踏まえた上で、論理展開が担保されるように訳出すること。
- 専門用語は専門用語として原語を借用して伝達すること。
- 聴覚障害学生が学ぶ学術的内容の高度化に対応した通訳技術を提供すること。

¹² 石野麻衣子・吉川あゆみ・松崎 文・白澤麻弓・中島亜紀子・蓮池通子・中野聡子・岡田孝和・太田晴康（2011）学術的内容の高度専門化に伴う聴覚障害者の手話通訳に対するニーズの変化. 第49回（2011弘前大会）日本特殊教育学会発表論文集, 363.

吉川あゆみ・石野麻衣子・松崎文・白澤麻弓・中野聡子・岡田孝和・太田晴康（2011）高等教育における手話通訳の活用に関する研究—学術的内容の高度化に対応するための手話通訳の技術的ニーズに着目して—. 日本社会福祉学会第59回秋季大会報告要旨集.

【参考】第7回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 概要

本意見交換会は、第7回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム 分科会2での議論を参考に構成しました。

日 時：2011年11月6日（日）10:00～17:00

（10:00～12:15 分科会、12:15～14:00 ランチセッション、14:00～17:00 全体会）

会 場：つくば国際会議場（茨城県つくば市竹園 2-20-2）

参加者：340名

主 催：国立大学法人 筑波技術大学

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）

後 援：文部科学省

独立行政法人 日本学生支援機構（JASSO）

分科会2「みんなで考えよう！聴覚障害学生の望む通訳とは？

—よりよい手話通訳・パソコンノートテイクのために—」概要

企画コーディネーター：吉川 あゆみ氏

（PEPNet-Japan 情報保障評価事業代表、日本社会事業大学）

司 会：吉川 あゆみ氏（同上）

アドバイザー：中野 聡子氏（広島大学 アクセシビリティセンター）

窪田 祥子氏（産経新聞社 編集局 整理部）

山本 綾乃氏（群馬大学 教育学部教育人間科学系障害児教育専攻 2年）

※肩書きは当時のもの

分科会参加者：68名（聴覚障害学生、支援学生、支援担当教職員、手話通訳者など）

第3章 高等教育に対応するための 手話通訳技術とは？

前章までで、聴覚障害学生は、教員の話す内容を漏れなく、論理の展開を正確に伝えてほしいというニーズを持っていることがわかりました。

それでは、どのように通訳すれば論理の展開を的確に伝えることができるのでしょうか。本章では、高等教育に対応するための通訳技術を、PEPNet-Japan 情報保障評価事業で作成した「大学における手話通訳チェック表」にある「論理や態度の伝達」のチェック項目を元に解説していきます。

大学における手話通訳チェック表は、本冊子の巻末に掲載しています。ミシン目がついていますので、切り取ってご利用ください。

論理や態度を伝達するための技術とは

本事業の研究の結果、大学の講義に対応するためのチェックポイントとして、以下のよう技術が必要なことが明らかになっています。

項目	チェックポイント	ページ
論理や態度 の伝達	(1) 句や文の区切りや接続関係が明確に捉えられる。 文と文との間を結ぶ接続関係〔逆接、順接など〕がわかる。 など	p. 37
	(2) 議論の流れや論理展開が明確に伝わる。 ①文の主体や話者の交代が明確に伝わる。 ②文の主題と主題に対する説明の内容が捉えられる。 ③文の流れから話の論点や結論が明確に捉えられる。 など	p. 41
	(3) 話されている内容についての話者の態度が伝わってくる。 ①推測、断定、使役、可能、受身、義務、要求などの表現が伝わってくる。 ②句や文を表す直前に、話者の判断・態度を表す手話表現や非手指動作がある。 ③話者の態度の度合いが捉えられる。 など	p. 45

論理や態度 の伝達	<p>(4) 話を聞くことで学問的思考(批判的思考、創造的思考)が喚起される。</p> <p>①話者の論理を自分の中で再構成することができる。</p> <p>②話をもとに自分なりの意見や疑問を持つことができる。</p> <p>など</p>	p. 52
語彙選択	<p>(5) 日本語の概念に忠実な手話単語を選択している。</p> <p>①省略された日本語を必要に応じて具体的に表現している。</p> <p>②指示語の示す事柄を具体的に言い換えている。</p> <p>など</p>	p. 54
	<p>(6) 専門用語の意味がわかるような手話語彙が選択されている。</p> <p>①過剰な原語借用がない。</p> <p>②原語そのものが伝わるように日本語の口形がつけられている。</p> <p>など</p>	p. 58

「論理や態度の伝達」は、聴覚障害学生が大学の講義を理解するために重要な情報となる、講義の論理展開や、話者(教員)がどのような態度で話しているのかを正確に伝えるために必要な技術です。

「語彙選択」は、手話語彙を選択するにあたり、原文が持つ言葉のニュアンスを正確に伝えるための技術です。

モデル手話通訳 概要

本章で使用するモデル手話通訳1～手話通訳3は、前章で用いたモデル手話通訳A～手話通訳Cとは異なる映像を用いています。

今回のモデル手話通訳映像は、同一の起点談話をもとに手話通訳者が通訳を行い、収録したものを使用しました。映像は本冊子付属のDVDで見ることができますので、映像とあわせて読んでみてください。

(1) モデル手話通訳の原文

通訳した授業の原文（起点談話）は以下の通りです。

講義名：哲学

テーマ：福祉国家の優生学

福祉国家の前提になっているのは生の偶然性ですね。つまり、私たちが生きている人生ではどういうことが起きるかわからない。順風にいついてる人でも、えー、交通事故にあって障害を被るかもしれない。あるいは何らかの形で、例えばですね、専業主婦で万歳だ一なんて思っていたら、離婚されて、シングルマザーで生きていかざるをえない。という風になる場合だって起こる。あるいは男性だって失業が起こる、という、そういうその生の偶然性ですね。で、これが、あるから、生の保障をしよう、っていうことですね。生のセーフティネットを作って、様々な社会保障をすることによって、その一、生の保障をしましょう、ということを行っている、っていうのが福祉国家ですね。

ただ、問題はですね、生の保障をしましょう、ということになってくる時にですね、この生の保障をしていく時に、そこに書いてあるように、各人の生をトータルに把握して、それを国家にとっての経済的な有用性という観点から、評価をしていく。そういう権利を手に入れてしまう、っていうことですね。それを国家にとっての経済的な有用性という観点から評定する権利を手に入れる。つまり君たちの生を保障します、君たちの権利を保障しますけれども、あなたたちそれは国家にとって有用なのかどうかっていうのは、国家が評定をしますよ。生活保護の、えーとですね、えー、受けなさい。受けるには、こういう条件が必要です、こうこうですよ、っていう形で、えー、評定をしていく、っていうことですね。で例えば、遺伝子病疾患を、遺伝病患者を養っているのは国家だから、これらの人間がいなくなるように、ありとあらゆることを行う権利と義務が、国家や社会にあるんだ。従ってそこで、各種の公立施設で生活している者、あるいは福祉手当を受けて生活している者に不妊手術を強制的に行うことが許される。という風に考えていくわけですね。つまり、この生の保障をしていくけれども、その生を保障していくためには、その一、国家の経済的な有用性からすれば、できるだけ、その一、精神疾患っていうか、遺伝的な疾患が無いように、国家はしなければならない。ということで、強制的な不妊手術を行う権利が国家にはあるんだ、ということで、国家が知的障害者の生殖に関して介入をするということが行われているということになるわけですね。つまり、福祉国家ってのは、社会の恩恵によって、施設で、あるいは手当てを受けて生活している者が、同じような人間を再生産することを阻止する権利があるんだ。というふうに、してしまうわけですね。

（２）各モデル手話通訳映像の特徴

モデル手話通訳のそれぞれの特徴は以下の通りです。

手話通訳１：教員の音声日本語の語順にほぼ忠実な訳出をしている。口形も、表出される単語に合わせてほぼ音声日本語通りにつけられている。

手話通訳２：基本的には教員の音声日本語の語順に沿って手話を表出しており、一部で空間活用・写像的な表現を用いている。

手話通訳３：教員の音声日本語の語順にとらわれず、日本手話の文法に沿って手話通訳を行っている。

なお、異なる特徴を持ったモデル通訳を収録するために、各通訳者には上記のような特徴に応じた通訳をしていただくようお願いしました。よって、必ずしも各通訳者が本来的に持つ通訳の特徴と一致するとは限りません。

ではここからは、具体的に通訳の例を抜き出しながら見てみましょう。

論理や態度の伝達

（１）句や文の区切りや接続関係が明確に捉えられる。

文と文との間を結ぶ接続関係〔逆接、順接など〕がわかる。

原文

（福祉国家の前提になっているのは生の偶然性ですね。つまり、私たちが生きている人生ではどうい
うことが起きるかわからない。順風にいつている人でも、えー、交通事故にあって障害を被るかもしれ
ない。（中略）で、これが、あるから、生の保障をしよう、ってということですね。生のセーフティネ
ットを作って、様々な社会保障をすることによって、その一、生の保障をしましょう、ということを行
っている、っていうのが福祉国家ですね。）

ただ、問題はですね、生の保障をしましょう、ということになってくる時にですね、この生
の保障をしていく時に、そこに書いてあるように、各人の生をトータルに把握して、それを
国家にとっての経済的な有用性という観点から、評価をしていく。そういう権利を手に入れ
てしまう、ってということですね。

手話通訳 1

／FS（タダ）／問題／何／生きる／保障／考える／時／（間）／生きる／保障／時／
 PT-3／資料／書く／ある／nod／個人／個人／生きる／全て／つかむ／nod／国／家
M:ケイザイテキユウヨウセイ
 ／立場／経済／的／効果／性／考える／方法／から／評価／決める／
 ／PT-3（決める）／権利／つかむ／失敗／nod／

手話通訳 2

／nod／でも／問題／ある／（間）／PT-3（問題）／何／言う／
M:セイノホショウ RS:国 左 中央 右
 ／生きる／保障／時／PT-3／資料／書く／ある／nod／PT-3／PT-3／PT-3
M:ケイザイテキユウヨウセイ
 ／生きる／全て／つかむ／国／PT-1／経済／得／どちら／（間）／経済／的／効果／性
RS:国 左 中央 右
 ／見る／方法／から／指摘／指摘／指摘／行う／PT-1／権利／国／持つ／PT-1
 ／国／持つ（右上へ）／PT-3（右上）／
 ／PT-3（右上）／問題／nod／

手話通訳 3

RS:国に助けられる人々
 ／でも／国／助ける（受動）／良い／でも／生きる／保障／助ける／あげる／PT-3（国）
 ／（間）／時／生きる／保障／行う／時／（間）／資料／書く／ある／でも／一人一人
RS:国 M:ケイザイテキ
 ／生きる／生活／全部／調べる／見る／調べる／つかむ／nod／国／立場／経済／的／
ユウヨウセイ
 FS（ユウ）／使う／性／言う／見る／方法／から／人々／調べる／判断／する／nod
 ／
 ／良い／悪い／判断／行う／言う／権利／国／持つ／PT-3（国）／意味／



原文は、人生何が起こるかわからないという生の偶然性を福祉国家は保障してくれる、という福祉国家の“正の側面”を解説したあと、「ただ、」で逆接の接続詞を用いてつなぎ、それを実現すると実は問題も発生するという“負の側面”を話すという構造になっています。

手話通訳 1～3 で、該当する箇所を静止画で見てみましょう。

手話通訳 1



FS (タダ)



問題



何



生きる



保障



考える



時

手話通訳 2



でも



問題



ある



(間)



PT-3 (問題)



何



言う



生きる



保障



時

手話通訳 3



でも



国



助ける (受動)



良い



でも



生きる



保障



助ける



あげる



／PT-3 (国) ／



(間)



時



生きる



保障



行う



時

手話通訳 1 は指文字で／FS（タダ）／と表し、最低限原文に「ただ、」があることを伝えていきます。

手話通訳 2 は、「ただし問題がある。問題は何かというところ…」と訳出することで、聴覚障害学生の注意をひきつけ、接続関係を明確に伝えることができます。

さらに手話通訳 3 は、ただ手話単語として／でも／でつなげるだけでなく、RS も用いながら「国に助けてもらえるのは良いこと。でも生の保障をするのは国で、国は一人一人の生をトータルに把握して経済的有用性の観点から評価をしてしまう…」と訳出することで、はっきりと正の側面と負の側面を対比させ、論理展開を浮かび上がらせることに成功しています。

原文通り／でも／を表出するだけでも不十分ではありませんが、より明確な論理の伝達のためには、このような一工夫も必要です。

（２）議論の流れや論理展開が明確に伝わる。

- ① 文の主体や話者の交代が明確に伝わる。
- ② 文の主題と主題に対する説明の内容が捉えられる。
- ③ 文の流れから話の論点や結論が明確に捉えられる。

原 文

つまり君たちの生を保障します、君たちの権利を保障しますけれども、あなたたちそれは国家にとって有用なのかどうかっていうのは、国家が評定をしますよ。生活保護の、えーとですね、えー、受けなさい。受けるには、こういう条件が必要です、こうこうですよ、っていう形で、えー、評定をしていく、っていうことですね。で例えば、遺伝子病疾患を、遺伝病患者を養っているのは国家だから、これらの人間がいなくなるように、ありとあらゆることを行う権利と義務が、国家や社会にあるんだ。従ってそこで、各種の公立施設で生活している者、あるいは福祉手当を受けて生活している者に不妊手術を強制的に行うことが許される。という風に考えていくわけですね。

手話通訳 1

／つまり／あなたたち／生きる／保障／権利／保障／nod／でも／PT-3（保障）／国／家／立場／効果／どちら／国／家／決める／nod／

M:セイカツホゴ

／生活／守る／PT-3（保護）／金を払う／構わない／nod／でも／受ける／時／条件／

左から右へ

ある／（数を数える）／（間）／言う／形／判断／決める／

／例／遺伝（DNA の形）／遺伝（血）／病気／人々／育てる／国／家／nod／だから／PT-3／人々／なくす／ように／なんでも／事／行う／権利／FS（ギム）／国／家／ある／nod／

RS:福祉手当で生活する

／～によって／いろいろ／施設／生活／人々／また／福／FS（シ）／手／金／金をもら

人々

う／生活／人々／赤ちゃん／産む／無理／手術／（左右の卵管を切る）／行う／（間）

／PT-3（行う）／認める／PT-3／考える／方法／ある／

手話通訳 2

RS:国

／つまり／PT-2（左から右へ）／生きる／保障／あげる／構わない／（間）／権利／

保障／あげる／nod／でも／PT-2／国／PT-1／得／どちら／PT-1／決める／PT-1

／nod／

RS:国 M:保護

左

右

／例／生活／守る／受ける／希望／PT-2／nod／構わない／あげる／あげる／構わな

い／nod／

RS:国

／でも／条件／ある／nod／（数を数える）／もし／合わない／（否定の首振り）／い

いえ／断る／nod／判断／決める／PT-1／nod／国／決める／PT-1／PT-3／

／nod／例／遺伝（継ぐ）／血／病気／人々／食べる／あげる／誰／国／PT-1／

／だから／PT-3／減らす／目的／なんでも／手を出す／行う／構わない／PT-3（行
う）／nod／PT-3／権利／FS（ギム）／持つ／PT-1／nod／
／また／施設／生活／人々／nod／守る／お金をもらう／人々／PT-3（人々）／（間）
／無理矢理／FS（フニン）／赤ちゃん／産む／無理／（左右の卵管を切る）／nod／左
右の卵管を切る）／中央（左右の卵管を切る）／右（左右の卵管を切る）／押しつける／行う
／認める／構わない／認める／考える／方法／なる／nod／

手話通訳 3

／まとめ／RS:国みんな／権利／生きる／保障／助ける／あげる／RS:国でも／みんな／国／立場／
得／助ける（受動）／できる／どちら／言う／自分／決める／違う／国／PT-3（国）
／右決める／左決める／調べる／判断／行う／PT-3（国）／
／例／M:ホゴ生活／守る／ある／nod／M:ホゴ生活／守る／申し込む（受動）／できる／受ける／時
／条件／必要／（数を数える）／条件／合う／必要／
／落ちる／合格する／言う／国／PT-3（国）／判断／左決める／右決める／行う／PT-3
（国）／
／例／M:イデン血／病気／持つ／人々／いる／nod／助ける／国／PT-3（国）／
／RS:国助ける／M:イデンあげる／だから／血／病気／持つ／人々／減らす／希望／PT-3（国）／
／RS:国だから／減らす／目的／国／なんでも／行う／構わない／PT-3（国）／nod／RS:国権利
／ある／構わない／PT-3（国）／考える／方法／PT-3（国）／

③文の流れから話の論点や結論が明確に捉えられる

原文をまとめると

国家が生を保障する場合、その人が国家にとって有用なのかという評価を国家が行う。

↓

つまりそれは、国家にとってマイナスになる人をなくすために
ありとあらゆることを行う権利と義務を持つことである。

↓

従ってそのような人に対して国家が強制的に不妊手術を行うことも許される、

↓

という考え方になる。

という構造になります。

この構造を最も明確に伝えているのが手話通訳3です。①②で説明した通り、話の主体が誰であるかをRSと指さしによって伝え、主題と例示をはっきり分けているのに加え、要所要所で接続詞／だから／を用いていることで、より話の構造や結論をはっきりと伝わっています。また、話者が最も伝えたい「国家は何をしても許される（ことが問題である）」ことを／構わない／を複数回用いることで、より強く印象づけることに成功していると言えるでしょう。

(3) 話されている内容についての話者の態度が伝わる。

① 推定、断定、使役、可能、受身、義務、要求などの表現が伝わる。

② 句や文を表す直前に、
話者の判断・態度を表す手話表現や非手指動作がある。

③ 話者の態度の度合いが捉えられる。

原 文

従ってそこで、各種の公立施設で生活している者、あるいは福祉手当を受けて生活している者に不妊手術を強制的に行うことが許される。という風に考えていくわけですね。つまり、この生の保障をしていくけれども、その生を保障していくためには、その一、国家の経済的な有用性からすれば、できるだけ、その一、精神疾患っていうか、遺伝的な疾患が無いように、国家はしなければならない。ということで、強制的な不妊手術を行う権利が国家にはあるんだ、ということで、国家が知的障害者の生殖に関して介入をするということが行われているということになるわけですね。

手話通訳 1

RS:福祉手当で生活する
 /～によって/いろいろ/施設/生活/人々/また/福/FS(シ)/手/金/金をもら
 人々
 う/生活/人々/赤ちゃん/産む/無理/手術/(左右の卵管を切る)/行う/(間)
 /PT-3(行う)/認める/PT-3/考える/方法/ある/
 /まとめ/生きる/保障/行う/(間)/でも/PT-3/目的/(間)/国/家/経済/
 効果/経済/的/効果/性/から/見る/(間)/できる/だけ/精神/病気/一つ目
 /遺伝(DNAの形)/遺伝(血)/病気/なくす/必要/(間)/言う/意味/無理矢
 理/的/(左右の卵管を切る)/手術/行う/権利/国/家/ある/(間)/言う/事
 /(間)/国/家/知的/障害/人々/生まれる/生まれる/手を出す/事/行う/今
 まで/意味/です/

手話通訳 2

/また/施設/生活/人々/nod/守る/お金をもらう/人々/PT-3(人々)/(間)
 /無理矢理/FS(フニン)/赤ちゃん/産む/無理/(左右の卵管を切る)/nod/^左
^{中央}
 右の卵管を切る)/(左右の卵管を切る)/^右
 (左右の卵管を切る)/押しつける/行う
 /認める/構わない/認める/考える/方法/なる/nod/
 MJ:セイノホショウ
 /まとめ/あなたたち/生きる/保障/あげる/(間)/でも/(間)/国/経済/得
 /どちら/見る/方法/から/見る/
 /例/精神/病気/一つ目/遺伝(継ぐ)/病気/減らす/行う/必要/~ですよね/
 /だから/無理矢理/(左右の卵管を切る)/nod/^左
 (左右の卵管を切る)/^{中央}
^右
 卵管を切る)/(左右の卵管を切る)/押しつける/行う/権利/持つ/PT-1/nod
 /考える/方法/

左 中央 右
 /だから/少し前/説明/知的/障害/人々/生まれる/生まれる/生まれる/いいえ
 左 中央 右
 /減らす/(左右の卵管を切る)/(左右の卵管を切る)/(左右の卵管を切る)/行
 う/つながる/意味/ある/nod/

手話通訳 3

/だから/例/病気/持つ/人々/nod/例/施設/生活/人々/nod/また/福/
 FS(シ)/手/金/金をもらう/生活/人々/PT-3(人々)/対する/子ども/作る
 RS:国
 /認めない/いいえ/FS(フニン)/子ども/作る/無理/正面
 /（左右の卵管を切る）/手
 術/（左右の卵管を切る）/左
 /（左右の卵管を切る）/右
 /（左右の卵管を切る）/無理矢理
 /手を出す/行う/構わない/(間)/認める/構わない/なる/PT-3(国)/
 RS:国
 /生きる/保障/助ける/あげる/国/PT-3(国)/
 RS:人々 RS:国
 /でも/助ける(受動)/もらう/時/国/経済/得/経済/伸びる/必要/nod/だ
 RS:国 RS:国
 から/得/助ける(受動)/もらう/できる/どちら/時/良い/助ける(受動)/OK
 RS:国 M:イデン
 /でも/逆/血/病気/精神/病気/持つ/人々/減らす/希望/
 RS:国
 /減らす/なくす/必要/国/PT-3(国)/
 RS:国
 /だから/命令/行う/
 RS:国 左
 /だから/無理矢理/FS(フニン)/（左右の卵管を切る）/（左右の卵管を切る）/
 右
 /（左右の卵管を切る）/手を出す/行う/



①推定、断定、使役、可能、受身、義務、要求などの表現が伝わる。

原文「不妊手術を強制的に行うことが許される」を例に取り上げてみます。該当する箇所を静止画で見てください。

手話通訳 1



赤ちゃん



産む



無理



手術



(左右の卵管を切る)



行う



(間)



／PT-3（行う）／



認める

手話通訳 2



無理矢理



FS (フ)



FS (二)



FS (ン)



赤ちゃん



産む



無理



(左右の卵管を切る)



nod



(左右の卵管を切る
: 左)



(左右の卵管を切る
: 中央)



(左右の卵管を切る
: 右)



押しつける



行う



認める



構わない



認める

手話通訳 3



子ども



作る



認めない



いいえ



【使役】

「不妊手術を強制的に行う」は、国家（行為者）が施設で生活する者あるいは福祉手当を受けて生活している者（非行為者）に対して不妊手術を強制的に行う（行為）使役の関係です。手話通訳1は、不妊手術を／行う／という表現にとどまり、かつ最後の方まで主語がないため行為者が不明瞭で、使役であることは伝わりにくくなっています。手話通訳2は、／無理矢理／ 不妊手術を／押しつける／行う／という表現をすることで、強制的であることは伝わりますが、主語がないため行為者がわかりにくくなっています。手話通訳3は、RSで国家の立場であることを明確にし、かつ国家が／子ども／作る／認めない／いいえ（ダメの意）／と表した上で、／無理矢理／手を出す／行う／構わない／と表現

することで、はっきりと使役の関係を再現しています。

【可能】

原文「行うことが許される」は、国家による不妊手術が可能であることを説明しています。

手話通訳 1 は／PT-3（行う）／認める／

手話通訳 2 は／行う／認める／構わない／認める／

手話通訳 3 は／行う／構わない／（間）／認める／構わない／なる／PT-3（国）／

となっており、全て可能であることは伝わっているものの、手話通訳 1 は伝わり方が最も弱く、手話通訳 2・3 のように／構わない／が挿入されることで、行為者と非行為者の上下関係が伝わる通訳となっています。また手話通訳 3 は最後に／PT-3（国）／があることで、主語がはっきり伝わっています。

②句や文を表す直前に、話者の判断・態度を表す手話表現や非手指動作がある。

原文「つまり、この生の保障をしていくけれども、その生を保障していくためには、その一、国家の経済的な有用性からすれば、できるだけ、その一、精神疾患っていうか、遺伝的な疾患が無いように、国家はしなければならない。」に着目します。話者（教員）は、「国家が遺伝的な疾患が無いようにしなければいけない」事実を述べ、この事実に対する話者の判断（この事実に対して否定的な考えを持っている、または肯定的な考えを持っている等）は保留にしています。この判断保留とは、この時点では事実に対して良いとも悪いとも言っていない、ということです。

これを最もわかりやすく伝えているのが手話通訳 3 です。手話通訳 3 を日本語訳すると、

国は生の保障をする。“でも” 国の経済が伸びる必要がある。“だから” 国にとってその人がプラスになるなら助ける。“でも” “逆に” 遺伝的な疾患がある人を国は減らす必要がある。

というように、文の直前に国の態度を明示する語を提示していることがわかります。加えて、RS を用いつつ、該当する句や文を表す直前から判断・態度の表情表現を抑え目にすることで、話者自身の判断を保留しています。また、これが聴覚障害学生にとって話題となっている国の態度にフォーカスしやすいことにつながっていると思います。さらに、最後に／減らす／なくす／必要／国／PT-3（国）／と表現することで、“～と判断しているのは国である” と明示し、教員の判断ではないことを伝えています。

③話者の態度の度合いが捉えられる。

原文「精神疾患っていうか、遺伝的な疾患が無いように、国家はしなければならない。」

ということで、強制的な不妊手術を行う権利が国家にはあるんだ、ということで、国家が知的障害者の生殖に関して介入をするということが行われている」を見ると、話者がかなり強い態度で国家の実態について説明していることがわかります。

手話通訳1は、／必要／、／無理矢理／、／権利／国／家／ある／などを用いています。話者の主張の強さまでは伝わりづらい表現になっています。手話通訳2は、／必要／、／無理矢理／、／権利／持つ／PT-1／nod／という表現や、／子ども／ほしい／いいえ／関係ない／（卵管を切る）／などのRSを用いた表現でやや強さの伝わる表現になりました。手話通訳3は、当該箇所の直前からRSをふんだんに用いてなぜ精神疾患の人や知的障害者に不妊手術をする必要があるのかを一連の流れで説明し、その上で／だから／命令／必要／とRSを用いて表現し、“だから不妊手術を無理矢理行う”と結論づけている点で、最も態度の度合いが伝わる表現となっています。

ただし手話通訳3は、原文「強制的な不妊手術を行う権利が国家にはあるんだ」の「権利」の表現がなされておらず、聴覚障害学生によっては、キーワードとして権利という言葉は表現してほしいというニーズがある可能性があります。

（４）話を聞くことで学問的思考（批判的思考、創造的思考）が喚起される。

① 話者の論理を自分の中で再構成することができる。

② 話をもとに自分なりの意見や疑問を持つことができる。

原文

従ってそこで、各種の公立施設で生活している者、あるいは福祉手当を受けて生活している者に不妊手術を強制的に行うことが許される。という風に考えていくわけですね。

手話通訳1

／～によって／いろいろ／施設／生活／人々／また／福／FS（シ）／手／金／金をもらう／生活／人々／赤ちゃん／産む／無理／手術／（左右の卵管を切る）／行う／（間）／PT-3（行う）／認める／PT-3／考える／方法／ある／

RS:福祉手当で生活する人々

手話通訳 2

／また／施設／生活／人々／nod／守る／お金をもらう／人々／PT-3（人々）／（間）
 ／無理矢理／FS（フニン）／赤ちゃん／産む／無理／（左右の卵管を切る）／nod／^左
 右の卵管を切る）／^{中央}（左右の卵管を切る）／^右（左右の卵管を切る）／押しつける／行う
 ／認める／構わない／認める／考える／方法／なる／nod／

手話通訳 3

／だから／例／病気／持つ／人々／nod／例／施設／生活／人々／nod／また／福／
 FS（シ）／手／金／金をもらう／生活／人々／PT-3（人々）／対する／^{RS:国}子ども／作る
 正面
 ／認めない／いいえ／FS（フニン）／子ども／作る／無理／（左右の卵管を切る）／手
 術／（左右の卵管を切る）／^左（左右の卵管を切る）／^右（左右の卵管を切る）／無理矢理
 ／手を出す／行う／構わない／（間）／認める／構わない／なる／PT-3（国）／



①話者の論理を自分の中で再構成することができる。

②話をもとに自分なりの意見や疑問を持つことができる。

原文「～という風に考えいてくわけですね。」は、受講している学生に論理の筋道を提示する言葉になります。手話通訳1は“～という考え方がある”となり、他の考え方もあるように捉えられ、「～と考えていく」とはニュアンスが異なります。手話通訳2は“～という考え方になる”となり、教員の意図は伝わっています。手話通訳3は「～という風に考えいてくわけですね。」を直接は表現していないものの、／認める／構わない／なる／PT-3（国）／と重ねて表現することで、国が人々の上に立って不妊手術を行うことが許されることを強調しています。これにより、聴覚障害学生は論理展開を理解しやすくなり、意見

や疑問を抱けるようになる効果があると考えられます。

どのような表現をすれば聴覚障害学生が自分なりに理解し思考することができるかは、聴覚障害学生とよく話し合い、ニーズをもとに決定していく必要があると思われます。

語彙選択

(5) 日本語の概念に忠実な手話単語を選択している。

① 省略された日本語を必要に応じて具体的に表現している。

② 指示語の示す事柄を具体的に言い換えている。

原文

つまり、私たちが生きている人生ではどうことが起きるかわからない。順風にいつている人でも、えー、交通事故にあつて障害を被るかもしれない。あるいは何らかの形で、例えばですね、専業主婦で万歳だーなんて思っていたら、離婚されて、シングルマザーで生きていかざるをえない。という風になる場合だって起こる。あるいは男性だって失業が起こる、という、そういうその生の偶然性ですね。で、これが、あるから、生の保障をしよう、っていうことですね。

①主語の省略

②指示語

手話通訳 1

／私たち／人生／内／何／事／起こる／わからない／
／スムーズ／生活／思う／でも／交通事故／障害／負う（両肩）／だろう／わからない／
／RS:専業主婦／また／専門／主婦／ばんざい／思う／離婚（女性を固定し、男性を離す）／M:シングル／独り（女
性）／マザー／母／生きる／行く／必要／PT-3／時／ある／
／また／男性／同じ／クビ（受動）／ある／だろう／わからない／
／PT-3／生きる／偶然／性／言う／ある／
／PT-3／ある／だから／生きる／保障／する／nod／

手話通訳 2

M:セイノグウセンゼイ
 /生きる/偶然/性/(間)/意味/何/(間)/人生/何/起こる/わからない/言
 う/意味/
RS:スムーズに生活していた人 RS:スムーズに生活していた人
 /例/スムーズ/生活/思う/事故/ケガ/障害/例/わからない/
RS:専業主婦
 /また/結婚/主婦/専門/主婦/私/楽/ばんざい/思う/夫/振る(受動)/離婚
M:シングル
 /独り/赤ちゃん/世話/行き詰まる/例/わからない/
RS:男性
 /また/男性/同じ/会社/クビ(受動)/フリーター/(両手を下に向けて振る)/
 例/わからない/PT-3/
M:セイノホショウ
 /PT-3/例/起こる/起こる/起こる/ある/だから/生きる/保障/あげる/考
 える/方法/PT-3/

手話通訳 3

/まとめ/生活/内/何/起こる/わからない/意味/
 /例/幸せ/生活/人々/PT-3(人々)/nod/交通事故/障害/人々/なる/わから
 ない/
M:センギョウシュフ M:シングルマザー
 /また/例/結婚/後/専門/主婦/幸せ/楽しい/後/離婚/nod/独り(女性)/
 母/なる/わからない/nod/
 /何/起こる/わからない/
 /また/男性/同じ/
 /仕事/クビ(能動)/nod/仕事/ない/(両手を下に向けて振る)/行き詰まる/
 壁にあたる/来る/わからない/nod/言う/生きる/偶然/性/ある/
 /偶然/起こる/ある/だから/国/PT-3(国)/nod/生きる/保障/助ける/あげ
 る/意味/PT-3(国)/



原文「で、これが、あるから、生の保障をしよう、っていうことですね。」を例として取り上げます。該当する箇所を静止画で見てみましょう。

手話通訳 1



PT-3



ある



だから



生きる



保障



する



nod

手話通訳 2



PT-3



例



起こる



起こる



起こる



ある



だから



生きる



保障



あげる



考える



方法



PT-3

手話通訳 3



偶然



起こる



ある



だから



国



PT-3 (国)



nod



生きる



保障



助ける



あげる



意味



PT-3 (国)

①省略された日本語を必要に応じて具体的に表現している。

原文「で、これが、あるから、生の保障をしよう、っていいことですね。」では、生の保障を行うという行為が誰によって行われるのか、という主語が省略されています。手話通訳1は原文通り通訳でも主語が省略されたままです。手話通訳2も“生の保障をしてあげる”というニュアンスにはなっているものの、主語は明示されていません。手話通訳3では、当該部分直前に／国／PT-3（国）／と表すことで、聴覚障害学生から見て左上の空間を用いて国を代名詞しており、その上で／生きる／保障／助ける／あげる／意味／PT-3（国）／と表出することで、生の保障を行うのが国であることをはっきりと伝えています。

②指示語の示す事柄を具体的に言い換えている。

原文「で、これが、あるから、・・・」の「これ」は、予測できない人生で起こる出来事を指しています。手話通訳1のように／PT-3／では、何を指しているのかわりにくくなります。よって、手話通訳2のように“直前まで説明されていた例のような出来事が起こることはまあある”と言い換えるか、もしくは手話通訳3のように“偶然の出来事はある”と言い換えるとわかりやすくなるでしょう。

（6）専門用語の意味がわかるような手話語彙が選択されている。

① 過剰な原語借用をしていない。

② 原語そのものが伝わるように日本語の口形がつけられている。

原 文

各人の生をトータルに把握して、それを国家にとっての経済的な有用性という観点から、評価をしていく。

手話通訳1

／個人／個人／生きる／全て／つかむ／nod／国／家／立場／M:ケイザイテキウヨウセイ／経済／的／効果／性／考
える／方法／から／評価／決める／

手話通訳 2

RS:国 左 中央 右
 /PT-3/PT-3/PT-3/生きる/全て/つかむ/国/PT-1/経済/得/どちら/
 M:ケイザイテキユウヨウセイ RS:国 左 中央 右
 (間) /経済/的/効果/性/見る/方法/から/指摘/指摘/指摘/行う/PT-1/

手話通訳 3

RS:国
 /一人一人/生きる/生活/全部/調べる/見る/調べる/つかむ/nod/国/立場/
 M:ケイザイテキユウヨウセイ
 経済/的/FS(ユウ)/使う/性/言う/見る/方法/から/人々/調べる/判断/す
 る/nod/



専門用語として「経済的な有用性」という言葉が初めて使われる場面です。「有用性」にあたる手話をどのように表すかがポイントになります。

手話通訳 1・2 は、/経済/的/効果/性/に口形をつけており、手話通訳 3 は有用性の「有」にあたる部分のみを指文字で表し、「用」にあたる部分を/使う/と表現しながら口形をつけています。どちらも適切に原語借用しており、原語がわかるように口形もついています。

初めて専門用語が使われるタイミングでは、より正確に専門用語を伝えるために/経済/的/FS(ユウヨウ)/性/(間)/経済/的/効果/性/というように、指文字で伝えた後で原語借用による手話表現を重ねる方法が効果的でしょう。

ろう者から見たモデル通訳

前ページまでで、モデル通訳を参考にしながら、高等教育に対応するための通訳技術を解説してきました。最後に、実際に研究職に就いているろう者はこのモデル通訳をどのように見たか、論理や態度の伝達・語彙選択の視点から解説します。

地域の手話通訳では、利用するろう者や難聴者のニーズに応じて、日本手話あるいは日本語対応手話(手指日本語)のどれを使うのが主な基準になるかもしれません。しかし高等教育や高度専門領域で求められる手話通訳では、モデル通訳を見れば、利用者が話者の論理や態度、専門用語の概念など学術的な内容が把握できるかが主な基準になります。

具体的にどのような手話通訳技術が求められるのかを3つのモデル通訳から考えてみると、次の2点が挙げられると思います。

1. 学術的な内容に対応できる高度なリテラシー
2. 論理・態度、語彙概念が把握できる手話通訳技術



まず1について説明します。第2章の「聴覚障害学生のニーズ」、第3章の「高等教育に対応するための手話通訳技術とは？」で、話者の意図、論理展開、原語借用などいかに伝えるかを述べていました。「いかに伝えるか」は、訳出表現に焦点を当てて議論されることが多いのですが、それだけでなく、「いかに伝えるか」の前に話者の発話内容から「何を伝えるか」論理的に把握する能力、すなわちリテラシー(注1)が求められます。とりわけ高等教育では、学術的な内容に対応できる高度なリテラシー活動ができることが重要です。手話通訳を利用する私たちは、教員の論理を詳しく把握し、自分も学問的に思考できるように成長したいという教育的ニーズがあります。

講義等では、話者がどのような論理・態度で議論を進めるのか、議論で扱われる用語の概念は何かを把握する必要があります。モデル通訳は総合的に見れば、手話通訳1→2→3の順で論理展開や判断・態度が明確に滞りなく理解しやすいです。訳出表現の技術だけでなく、「何を伝えるか」論理的に把握できているからだと思います。具体例は、第3章「高等教育に対応するための手話通訳技術とは？」で詳しく述べられている通りです。ですから、手話通訳者の皆さんには、話者の論理を把握するためにリテラシーを高めたり、講義担当教員との打ち合わせや提供資料を読む時も語意だけでなく論理や態度までできる限り捉えてみてほしいと思います。

何を伝えるか → いかに伝えるか
(理解し、訳出する内容) (訳出方法)



【注1】

リテラシーの意味は、読み書き能力であるが、その本質には、書かれた(語られた)ものを「読み解く」能力がある。書かれた(語られた)文がどのようなコードで記述されているかを理解する能力と言える。コードとは、文字、語彙、文法だけでなく、社会的コード(高度な専門領域における知識世界、文章の論理構成、判断や態度、専門用語の概念など)も含まれている。

次に2について。1つは、論理や態度を伝達するための基本として、利用者が、90分間という長い時間の講義で考えながら見続けていられるようなプロソディ(例. リズム、抑揚、強勢、フットなど)が必要です。モデル通訳の手話通訳1、2は、様々な単語を表す手指動作がどれも同じようなリズムで表され、顔の動きの変化も単調で少ないため、内容の構成が捉えにくく、長時間見ているのは辛いです。手話通訳3は、句や文のまとまりがつかめるように単語を表す手指動作のリズム等を変化させたり強調したい時は動作を強くしたり、句や文の区切りを示すNMMを示しているの、内容構成を捉えながら内容を理解できます。講義室は広いので、少し離れても見えるように、手話通訳3の句や文の区切りや疑問等のNMMを少し大きめにしたり、特に句と文の違いもわかるように顔の大きさを調整するなど配慮があるとよいですね。

もう1つは、論理や態度、語彙概念の伝達の工夫です。手話通訳1は直訳・逐語訳のように訳出しており、単語1つひとつはわかりますが、全体としてどのような内容や論理展開になっているのかは、把握するのに少し苦労します。一方、手話通訳2、3は、論理展開や判断・態度が把握できるように必要な指さしや語句を添加したりRSを活用しています。特に、手話通訳3は、伝える内容を再構成することで論理展開を明確化したことはよいと思います。語彙概念については、第3章「高等教育に対応するための手話通訳技術とは？」でも指摘があった通り、重要な語彙は、言い換えるよりも指文字や原語借用で訳出してほしいです。

手話通訳2は、表情による表現を多用していましたが、どれも似たような表情に見えて判断の程度や態度のニュアンスがつかみにくいので、手話通訳3のように表情表現は別の解釈を与えないよう抑え目にして、手話語彙の方を細かく表現し分けたり手指動作の動きに強弱を加えたりするとよいでしょう。また、手話通訳3は、言及する事象間の関係がわかるように手話空間を広くとったり、疑問、推測、断定や否定等の判断やある事象への態度を示すNMMやRSもより明確に示すと、論理や態度の細部まで把握しやすくなるでしょう。

手話通訳者の皆さん、ろう学生が高等教育の恩恵に浴し、学問的思考を体得し、優れた人材として社会へ旅立つことができるように、論理・態度等を把握できるリテラシーとそれを伝える手話通訳技術を、できることから身につけていきましょう！



第4章

高度専門領域の通訳事例

弁護士：田門浩氏 手話通訳者：土橋照美氏

前章までで、大学で求められる手話通訳技術とは何かを具体的に見てきました。最後に、聴覚障害者が実際に高度専門領域でどのように手話通訳を使いながら活躍しているのか、事例を見てみましょう。

田門浩氏は、日本で数少ない聴覚障害を持つ弁護士です。法曹界という高度に専門的な領域で法律のプロフェッショナルとして仕事をするにあたり、ご自身の専任手話通訳者を雇っています。田門氏がどのように手話通訳を利用しているのか、また専任手話通訳者である土橋照美氏はどのようなことに気をつけて通訳をしているのか、そのポイントについて寄稿していただきました。

田門浩氏（弁護士）



田門浩氏（弁護士、都民総合法律事務所所属）

1967年福島市出生。生まれつきろうあ者。水戸、札幌、千葉、筑波大学附属の各聾学校に在籍。1990年東京大学法学部卒業。1991～6年千葉市役所勤務。1996～8年最高裁判所研修所。1998年～弁護士登録。2002～3年関東弁護士連合会人権擁護委員会副委員長。2003～4年米国ギャローデット大学留学。2008年～筑波技術大学非常勤講師。

現在手話通訳をどのような場面で、どのような使い方をしていますか？
使用頻度も教えてください。



①裁判所での手続、②裁判所での尋問、③法律相談、④依頼者との面談、⑤他の弁護士や検察官との面談（裁判所外）、⑥相手方（被害者など）との示談交渉、⑦警察署等での接見、⑧電話、⑨会議、⑩研修、⑪講演の場面で手話通訳者を利用しています。

手話通訳、読み取り通訳両方ともあり、ほぼ毎日手話通訳を使用しています。

手話通訳者は私自らが探して確保した上で、私が通訳者をいろいろな場面で通訳を依頼して通訳をしてもらう形でOJT（オンザジョブトレーニングの略。工作中、仕事遂行

を通して訓練をすること）を行いその中で法律通訳のニーズを理解してもらう方法を取っています。さらに、通訳の結果については私が全面的に責任を取ります。すなわち、私の場合は、単に手話通訳者から手話通訳をしてもらうという立場ではなくて、私が主体的に手話通訳者を利用しその結果による責任は私が全面的に負うということです。

専属の手話通訳者を1名、私が雇用し、月曜日から金曜日まで、毎日午前10時から午後6時30分まで、私のいる法律事務所まで出勤してもらっています。法律相談、会議、研修などの場面では、臨時に、他の特定の手話通訳者に依頼して通訳をしてもらうことも多いです。

それらの手話通訳者の費用は、基本的には私が支払っています。所属している東京弁護士会の研修等については、私や障害を持つ他の弁護士からの働きかけで制定された「聴力・視力障害者会員の会務活動に要する費用援助に関する規則」（平成10年12月7日制定）に基づいて東京弁護士会が手話通訳費用を助成しています。

田門さんの手話通訳に対するニーズとは何ですか？法律という専門分野でぜひお願いしたい通訳者とはどんな人ですか？



私のニーズを最も満たした通訳者は、以下のような力を持っています。法律という専門分野で働くにあたり、手話通訳者は以下のような力を持った人をお願いしたいです。

①事前に内容を把握ないし理解できていること

普段から裁判の仕組み等について勉強をしている、いろいろな場面で私とともに通訳をしてもらう形でOJTを行いそれにより知識を得ている、通訳が始まる前に私からきちんと説明をしそれに対して適切に質問をするなどして説明内容を理解できるよう努めている（関係当事者の属性（相手方の中には特に配慮を要する人々もいるので）、事案の内容、面談等の目的、私の意図、予想されるべき解決の方向性など。研修・講演の場合は事前に関係資料を用意する。）

②手話通訳者としての基本的な技術を持っていること

手話通訳、読み取り通訳ともに基本的な技術を持っていること。

③相手方や私の発言の意図をよく汲み取れる能力があること、また、必要に応じて適切にインターベンションができる能力があること

上記①のとおり内容を把握・理解できていることに加えて、通訳現場において発言の意図を汲み取ることができる日本語力、手話力を持っていること。

また、当事者間の会話には主語が省略されたり声が小さかったり遠回しの言い方をされたりすることもあるので、適切に通訳者から本人に尋ねたりするなどのインターベンション（介入）をする必要があり、これを上手に行うことができる能力も必要です。

④状況に応じて日本手話、日本語対应手話を使い分けられていること

詳細は専任手話通訳者である土橋さんの原稿を参照してください。

⑤状況に応じて適切かつ十分な読み取り通訳能力があること

特に、私の場合は、読み取り通訳が必要なことが極めて多いです。依頼者の8割は聴者で、ろう者は2割しかいません。このため、手話通訳者には、最低限でも一般社会に求められる読み取り通訳の基本的な能力が必要です。これに加えて、相手方の属性（裁判官・検察官・弁護士などの法律の専門家かどうか、物の言い方や内容について配慮が必要な相手方なのかどうかなど）、私が相手方に話す際の目的・意図をきちんと私と共有して、状況に応じて適切な言葉で私の手話を読み取る能力も重要です。

田門さんはニーズをどのように通訳者に伝えているのですか？



私のニーズは上記の5点ですが、通訳者にいろいろな場面で通訳を依頼して通訳をしてもらう形でOJTを行いその中で法律通訳のニーズを理解してもらう方法を取っています。すなわち、実際の通訳経験をとおしてニーズを伝えるという方法です。私が通訳者を選び出した以上は、通訳がうまくいかない事態が万一あった場合には私が責任を負い、通訳者に責任を負わせるものではありません。ただ、幸いにも今までに通訳がうまくいかなかったというような事態はありませんでした。

ここの一番の会議ややりとり前の手話通訳前の打ち合わせでは、通訳者にニーズとして何を伝えますか？



ここの一番のやりとりにおいては、事前にOJT等を行って上記ニーズを把握している手話通訳者に依頼をしています。このため、通訳直前の打合せでは、特にニーズについて説明をすることはしていません。

事前の打ち合わせでは、相手方の属性（相手方の中には特に配慮を要する人々もいるので）、事案の内容、面談等の目的、私の意図、予想されるべき解決の方向性などを説明します。研修・講演の場合は事前に関係資料を用意します。

通訳を見て、他の情報と比較して伝わってきづらいつ感じる情報はありますか？



事前にOJT等を行ってニーズを把握している手話通訳者に依頼をしているので、伝わってきづらいつ感じる情報はあひません。

手話通訳の限界を感じることはありますか？それはどのような場面ですか？



限界を感じることはあひません。

もし限界があるとすれば、それは手話通訳者の利用者であるろう者自身の責任であると思ひています。そもそも限界を感じることはあるならば、私はプロの弁護士としての仕事はできません。そのような限界を感じることはないようにOJTなどを通じて手話通訳者には私のニーズを理解してもらうよう努めてきたつもりです。また、逆に、OJTをとおして個々の手話通訳者の能力を見極めその通訳内容を私の方で咀嚼して対応できるようにしてきました（例えば専門用語を聞き間違えて手話表現をしたとしても私の方で正しい用語に理解して修正できます）。このため、幸いにも今までに限界を感じることはあひませんでした。

土橋照美氏（手話通訳者）



土橋照美氏（田門浩氏専任手話通訳者、都民総合法律事務所所属）

手話通訳士。田門氏が1996年～最高裁司法研修所にて司法修習を始めるにあたり組まれた通訳チームに参加。現在は田門氏の専任手話通訳者として雇用され、手話通訳業務にあたっている。

田門氏の通訳で注意を払うポイントは何ですか？



ポイントは通訳をする分野ごとに異なります。

聴覚障害者が依頼者の場合には田門弁護士が直接対応するため、基本的に私が同席する

ことはありません。私が通訳するのは相手が聴者の時です。そして相手が一般依頼者なのか、法曹関係者なのかによって通訳方法が異なってきます。

相手が法曹関係者の場合、例えば、法廷での口頭弁論手続きは定型的なもののなので、手続きの流れさえ覚えてしまえば、それほど困難ではありません。難しいのは、裁判所の書記官室で、裁判官や相手方弁護士と争点整理をする「弁論準備手続き」での議論や、弁護団会議での法律構成について議論をするときの通訳です。このような場面では、各法律の論点についての理解があればあるほどよい通訳ができます。私の場合は弁護士の通訳を行うことが決まってから、大学の通信教育部で法律全般を学びましたが、それだけでは十分ではなく、実際の業務を行うなかでその都度学び、積み重ねてきました。

次に一般依頼者の場合です。田門弁護士も書かれているように、依頼者の8割は聴者です。一般の聴者からの依頼は弁護士会や事業者団体主催の法律相談がきっかけとなります。こうした場所での法律相談は、原則30分の間に、相談者の法律上の問題点を聞き出し、一定の範囲で方針が示せるように通訳せねばならないため、相談者の日本語を忠実に再現することよりも、相談者の抱える問題点と希望する解決策を、早く弁護士が把握できるように通訳する必要があります。この場合は、日本語対応の手話よりも、日本手話で通訳をする方が適切です。しかし、場面によって、日本語そのものの言い回しや、どのような言葉でやりとりしたかが重要なポイントになるとときには、日本語対応手話も使います。

一方、法廷での人証調べの場面では、一問一答がそのまま調書として残り、裁判官が事実認定するための重要な証拠となることから「日本語対応の手話」で通訳します。主語が抜けても、あいまいな言い回しや含みもそのまま再現するように努めます。これは、証人らの言い方によって、尋問する側の弁護士が、発言の趣旨や意図を明確にさせるために、さらに質問を重ねなければならなかったり、質問方法や質問内容を変えなければならないことがあるからです。

詳細は、2003年発行の季刊MIMI 99号『弁護士の手話通訳業務』に掲載されています。

付け加えて言うと、その通訳場面での目的（ねらい）がどこにあるのかによって、通訳方法が変わるということです。

相談者（依頼者）との会話や電話での通訳場面では、「相談者（依頼者、顧客）の満足」が一番大事であり、心地よくテンポ良くコミュニケーションできること（通訳を介して話をしていると意識させないぐらい。通訳を介しているが故に待たねばならないということがないように）を最優先に行うということです。これに加えて、弁護士が的確な法的判断を行うために「必要な情報」をきちんと依頼者（相談者、顧客）から引き出すということも大事です。そして、依頼者（相談者、顧客）が知りたいと思っていることに、的確にスピーディに答える（応える）ことです。私はこのような場面では、いわゆる日本手話を中心に使用しています。キーワードや話し方の癖を伝えたい部分は指文字等で日本語として伝える場合もあります。事実関係の中でどのような言葉のやりとりがあったのかを確認する時も、もちろん日本語を手指で表出することになります。

裁判官室での裁判官との法律構成についてやりとりをする場合は、法律的論理の厳密さ

が求められるので、日本語を手指で表出する方法が多くなります。裁判官がどのような言い回しで日本語を語ったのか、それをどう解釈し判断するかは弁護士の仕事であり、可能な限りそのまま弁護士に伝えるべき場面だからです。

法廷での定型的な通常の手続についてはスピードを重視して日本手話が中心になりますが、証人尋問などの場合は、どのような日本語が使われたかのかが「調書」という日本語の形で裁判の証拠となるので、日本語を手指で表出していくことになります。この作業は、通訳者も、読み取る側の弁護士も非常に神経を集中するので、疲労は最大となります。尋問時間が1時間を超える場合は、通訳者をもう一人依頼しています。しかし、通訳を受ける弁護士は一人で交替がおりませんので、大変だと思います。

田門氏の通訳の中で、最も伝えるのが難しいと感じるのはどのような内容ですか？



法律や裁判手続についての知識がなければ、通訳をするのが難しいのは当然です。自分の知らない単語は、そもそも正しく聞き取ることができないので、正確に日本語を表出することすらできません。入職したばかりの頃、裁判所の書記官との電話のやりとりの通訳の際「ダイサンサイムシャノチンジュツサイコクショは・・・」と早口で言われ、「第三・・・なんとか・・・ショ」としか通訳できず、しかし、弁護士本人は、話の文脈からどのような専門用語が使われるのかを判っているので、それでも何とか用件を済ますことができたということがありました。あとで「第三債務者の陳述催告書」と言っていたことが判りました。

通訳で難しいのは、専門的な内容に関わる場合の読み取り通訳です。これは、まだ、司法研修所の修習生だった時にあったことですが、教官から「刑事裁判を傍聴したことはありますか？」との問いかけに対し、田門氏の発言を私が「聴覚障害者が被告人になっている裁判で、被告人尋問の時に傍聴したことがあります。」と読み取りました。休憩時間になって、教官がわざわざ私のところへ来て「先ほど、田門君が「被告人尋問」と言ったけれども、あれは田門君が言った言葉かね？刑事裁判で被告人に訊くときは、「被告人尋問」とは言わず、「被告人質問」と言うんだよ」と。手話では「質問」に「シツモン」という口形、しかし、裁判のときには「尋問」というものだというのが私の頭にあったこと、「シツモン」も「ジンモン」も口形はかなり似通っていること等、法律関係の読み取りを正確に行うのはやはり知識がないと難しいです。

「不法行為」と「違法行為」、手話で表現すると同じ手話を使うと思いますが、その文脈で正しく読み取るには、法律の知識が必要になってきます。

聞き取り通訳については、専門用語の分野よりは、一般に話されている日本語の話し言葉のうち、短い2～3語文の手話化が難しいことがあります。テンポ良くコミュニケーションを運ぶためのスピードが求められているわけですので、直訳した2～3語の手話では時に通じにくいこともあり、少し長めに意識しなければならず、そうすると相手を待たせ

てしまうことになるので、気持ちが焦ってしまい、依頼者との話が終わってから、あとで「あれはこういう話だった」と田門氏に伝えることもあります。つまり通訳者である私は、田門氏にその瞬間に十分な情報を伝えることよりも、どちらかというと依頼者（相手）が違和感なく会話をしたという満足感の方を優先させているわけです。法律的判断などに関わらない、人間関係を築くためのコミュニケーションのための会話の場合は、そうしたことも許されると思っています。

その困難をどのように克服しましたか？または克服しようとしていますか？



上記のとおり、時と場合によっては、通訳の正確性よりも、なめらかなコミュニケーションの方を優先させるときがあるということです。私は田門弁護士の手話通訳者ではあるけれども、同時に田門弁護士と協働して依頼者（相談者・顧客）へのリーガルサービス（法的サービス）を提供する主体であると思っています。つまり、依頼者（相談者・顧客）の満足が優先されます。

田門氏によく言われる通訳上のニーズはありますか？それはどのようなことですか？



これまで一緒に働く中で、上記のような通訳方法で行うという合意形成ができています。

法律の知識等についての知識があればあるほど、的確な通訳ができるのは当然のことであり、それは努力目標として常にあると思います。

高度専門領域で初めて通訳を担う通訳者がいた場合、どのようなことをアドバイスしますか？



知らないことについては、的確な通訳はできないのは当然のこと。

しかし、通訳者が何を知るべきなのか、どんな知識を持っておくべきなのかについては、高度専門領域での通訳をもとめる側が、通訳者に伝えなければなりません。高度専門領域での通訳を求める側の方が、特にろう者本人が（あるいは通訳を依頼する高等教育機関が）通常、その分野では通訳者よりも知識が上なのです。福祉的サービスとして派遣されてきた手話通訳者に、いきなり高度専門領域での通訳を求めることには無理があると思います。高度専門領域での通訳を求める側が、通訳者の養成に責任をもち、通訳者の力量に応じて、

自らのために最大限に働いてもらえるよう通訳者を使いこなす技術が必要です。

高度専門領域における通訳を担う上で欠かせない技術はありますか？



普通の手話がきちんと使えること。

時と場、目的に応じて、必要な表現技術を使い分けられることができること。

当該専門分野の知識が十分あるに越したことはないの言うまでもありませんが、通訳をする側よりも、通訳を受ける側の方が知識量は圧倒的に多いはずなので、通訳を受ける側の「通訳者を自らの専門分野のために養成し、使いこなす力量」が問われるのではないのでしょうか。

これまでに述べたこと以外で、通訳を行う上での工夫はありますか？



事実関係が争点になる場面では、CL¹³の使い方には注意が必要です。CLの使い方によっては、予断を与えてしまいかねません。例えば、他人を棒で殴った場合に殺意があるのかどうか争点となる裁判では、具体的な動作・状況いかんによって結論が変わってきます。例えば、棒の大小長短、棒の持ち方、身体のどこを指して棒を動かしたのか、その速さはどれぐらいか、などの点が考慮されるのです。通訳者が自ら体験しているわけではない事柄をCLを用いて話す場合は、通訳者の想像が含まれていますので、何度も事前確認するなどの慎重さが求められます。

人間関係を築くためのおしゃべりの時には、CLが多くあった方が見る方も楽し、楽しくおしゃべりができるとおもいます。時と場に応じてどのような手話を使うのかを変えることが大事です。

¹³ CL

Classifire の略。日本語で類別詞(辞)と訳され、「～本」「～枚」のように何らかの共通属性を持った特定のクラスに分ける。日本手話も同様に、細長いもの、厚みのあるもの、薄いものといった名詞をその形状に応じて手の形や運動で表したり、運転する、駐車しているといった動詞をその動作の様態に応じて表現を変えたりする。

謝辞

本冊子作成の過程では、多くのろう者、手話通訳者、大学教員のみなさまにご協力いただきました。特に、情報保障評価事業コメンテーターの棚田茂氏、下島恭子氏、モデル手話通訳を快く引き受けてくださった手話通訳者のお力なしには、本冊子の発行は成しえませんでした。ご協力いただいた全ての方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク PEPNet-Japan

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク

(PEPNet-Japan) は、2004 年 10 月に筑波技術大学の

呼び掛けにより結成された高等教育機関間のネット

ワークで、これまでに聴覚障害学生を受け入れ、

積極的に支援を行ってきた連携大学・機関に

よって組織されています。

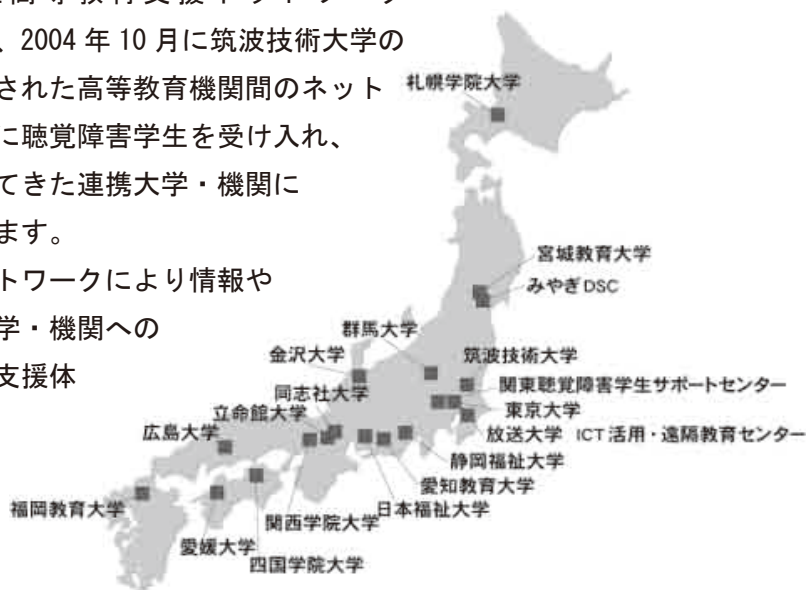
関係諸機関間のネットワークにより情報や

実践を蓄積し、他大学・機関への

発信を行うことで、支援体

制の全国的な拡充を

目指しています。



大学における手話通訳チェック表

通訳技術

全体像の把握	1	全体的に安心して、長く見ていられるか。	1 2 3 4 5			
			全くそう思わない	そう思わない	どちらでもない	そう思う
			1 2 3 4 5			
			1	2	3	4
			5			
見やすさ	2	全体的に講義の内容やストーリー（展開）がつかめるか。 （講義のねらいは何であったかが把握できるか。など）	1	2	3	4
	3	話者の雰囲気がよく伝わるか。	1	2	3	4
	4	手話のリズムに違和感がないか。	1	2	3	4
	5	手話単語や非手指動作の無駄な繰り返しがないか。 （“間”の取り方に違和感がないか。聞き逃しやミスによる無駄な動きがないか。通訳者が聞き逃しやミスを修正できているか。など）	1	2	3	4
	6	日本語の語順にこだわらず、手話として自然な文になっているか。	1	2	3	4
	7	表情や手話語彙の動きの強弱によって自然なイントネーションが表現されているか。 （手話単語や非手指動作の強弱は違和感のない通訳か。手話表現の大きさや位置は適切か。通訳者の上体の使い方は適切か。など）	1	2	3	4

表現技術

CL・空間活用	8	用語や説明の内容が、視覚的にわかるCL構文によって明確化されているか。 （使われているCLにバリエーションがあるか。用語や説明の内容が視覚的にわかるような表現が使われているか。板書やスライドの図を生かした手話表現をしているか。など）	1	2	3	4	5
NMS(非手指動作)	9	表現された手話に適切なNMS(非手指動作)が使われているか。 （目の開閉によって副詞的な意味が表現されているか。あごの動きによって副詞的な意味が表現されているか。口形によって副詞的な意味が表現されているか。など）	1	2	3	4	5
RS(リファレンシャルシフト)	10	視線の方向などを用いて人物が明確に表されているか。 （人物の交代がわかるか。複数の人物やその関係を表現し分けられるか。など）	1	2	3	4	5

講義に応じた技術(翻訳)

情報量・忠実さ	11	話の概要を理解するのに十分な情報が伝わってくるか。	1	2	3	4	5
	12	話の情報量に不足なく、話の細部が伝わるか。	1	2	3	4	5
	13	伝達されている情報に間違いやズレがないか。	1	2	3	4	5
	14	句や文の区切りや接続関係が明確に捉えられるか。 （文と文との間を結ぶ接続関係〔逆接、順接など〕がわかるか。など）	1	2	3	4	5
	15	議論の流れや論理展開が明確に伝わるか。 （文の主体や話者の交代が明確に伝わるか。文の主題と主題に対する説明の内容が捉えられるか。文の流れから話の論点や結論が明確に捉えられるか。など）	1	2	3	4	5
論理や態度の伝達	16	話されている内容についての話者の態度が伝わってくるか。 （推測、断定、使役、可能、受身、義務、要求などの表現が伝わってくるか。句や文を表す直前に、話者の判断・態度を表す手話表現や非手指動作があるか。話者の態度の度合いが捉えられるか。など）	1	2	3	4	5
	17	話を聞くことで学問的思考(批判的思考、創造的思考)が喚起されるか。 （話者の論理を自分の中で再構成することができるか。話をもとに自分なりの意見や疑問を持つことができるか。など）	1	2	3	4	5
	18	日本語の概念に忠実な手話単語を選択しているか。 （省略された日本語を必要に応じて具体的に表現しているか。指示語の示す事柄を具体的に言い換えているか。など）	1	2	3	4	5
	19	専門用語の意味がわかるような手話語彙が選択されているか。 （過剰な原語借用がないか。原語そのものが伝わるように日本語の口形がつけられているか。など）	1	2	3	4	5

総合評価

総合評価	20	手話通訳を見て講義を理解することができたか。 （この通訳で試験やレポートに臨めるか。学習目標を達成できるか。など）	1	2	3	4	5
	21	この手話通訳は自分にとって良い通訳だった。 （別の講義でもこの通訳を使いたい。など）	1	2	3	4	5

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）
情報保障評価事業（手話通訳）ワーキンググループ

◎吉川あゆみ（日本社会事業大学 社会事業研究所）

松崎 丈（宮城教育大学 特別支援教育講座）

白澤麻弓（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

石野麻衣子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

中島亜紀子（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

◎事業代表

「大学での手話通訳ガイドブック
—聴覚障害学生のニーズに応えよう！—」

発行日 2012 年 3 月 30 日

発 行 筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター
〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15

企 画 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）
情報保障評価事業（手話通訳）ワーキンググループ

編 集 石野麻衣子・白澤麻弓

※本事業は、文部科学省特別教育研究経費による
拠点形成プロジェクト（筑波技術大学）の一部です。



